

大妻学校の原点—裁縫・手芸

The Origin of Otsuma School; Sewing & Handcraft

大妻女子大学博物館
所蔵品選集

2016



大妻学校の原点-裁縫・手芸

The Origin of Otsuma School; Sewing & Handcraft

大妻女子大学博物館 所蔵品選集

2016

発刊にあたり

大妻学院創設者大妻コタカが、東京市麹町区紀尾井町七番地にある子爵大島久直陸軍大将（夫良馬の上官）邸内の13坪の借家に住みながら私塾を始めたのは、明治41年（1908）9月、コタカが24歳（数え年）の時である。この時、コタカが塾生15名に教えたのは、裁縫と手芸である。その後、明治43年（1910）4月に麹町区富士見町の山階宮邸内に居を移し「東京女子技芸教授所」と看板を掲げ、大正3年（1914）4月には教場を拡大して「私立大妻技芸伝習所」と改名し、大正6年（1917）2月7日に裁縫部・手芸部・師範部・講習部・家政科・選科・練習部を擁する東京府知事認可の実業学校「私立大妻技芸学校」を立ち上げた。その原点は裁縫と手芸であり、特徴は、これらを組み合わせた複合技芸にある。日本の女子教育の原点に大妻コタカが裁縫と手芸を据えたのは、衣食住と教育に亘る生活のすべての面に、女性が自らの手で、自らの行動で、直接関わる作業として裁縫と手芸があるからであり、そこには創意工夫と忍耐と完成の喜びが含まれ、その先に女性の自立が目指されているからである。

大妻女子大学博物館は「大妻コタカの生涯と大妻教育」、そして「日本人のくらしの知と美」をテーマとする博物館であり、大妻コタカの生涯に関わるさまざまな資料、また大妻教育に関する多彩な資料を収蔵しているが、卒業生から寄贈された裁縫の作品や手芸作品も数多く収蔵することを大きな特色としている。

平成27年度、当館では学院のご支援により、収蔵資料の中から裁縫および手芸に関する資料の整理登録を集中して行い、その集大成として図録を発刊する運びとなった。

大妻コタカが生涯を掛けて築き上げてきた女子教育の原点である裁縫と手芸に思いを馳せ、大妻学校設立の基本理念、大妻コタカの思いを感じていただければ幸甚である。

大妻女子大学博物館

目次

発刊にあたり…2

第1章 大妻女子大学博物館と収蔵品……………3

大妻女子大学博物館の歩み／沿革

第2章 大妻学校 裁縫・手芸の世界……………9

手芸作品に見る大妻コタカの生活哲学／裁縫／手芸

第3章 広がりのある博物館収蔵品……………35

大妻学校の機関誌／掛軸／生活用具／ジャワ更紗（パティック）／髪型／履物

資料編……………41

大妻学校略年表／掲載資料目録

◎本図録においては人名は歴史上の人物として敬称は省略いたします。◎表紙写真／「一つ身単衣祝着」部分（13頁参照）



第 1 章

大妻女子大学博物館と収蔵品

大妻女子大学博物館の歩み

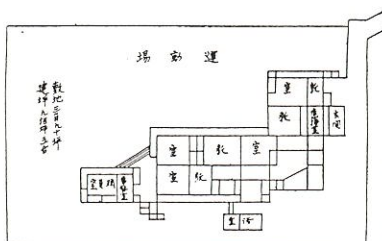
大妻女子大学博物館教授 真家 和生

平成19年(2007)4月1日に、大妻女子大学の全学的博物館施設として発足した「大妻女子大学生活科学資料館」は、平成24年(2012)2月21日に東京都教育委員会から博物館相当施設として指定を受け、これを期に、平成24年(2012)4月1日から「大妻女子大学博物館」と名称を改め、大妻女子大学博物館学芸員課程館務実習受け入れ先としての活動も含めた一般公開の博物館として活動を続けている。

大妻女子大学は、創設者大妻コタカが明治41年(1908)に裁縫と手芸の私塾を開いたのが始まりであり、今日に至るまで100有余年の歴史を有している。裁縫と手芸は大妻学校の原点である(小規模な私塾から、東京女子技芸教授所、私立大妻技芸伝習所などさまざまな名称の教育組織を経て、大妻女子大学を含む大妻学院に至るまでの大妻コタカが創設してきた教育組織のすべてを総称して大妻学校とする)。

大妻女子大学博物館は「大妻コタカの生涯と大妻教育」および「日本人の暮らしの知と美」を基本理念として、大妻コタカと夫良馬に関する資料、大妻学校に関する資料、そして日本人の暮らしに係わるさまざまな資料を収集・展示してきている。当館は、これら資料の収集・調査研究・整理保存・展示公開の活動を通じて、日本の女子教育における大妻コタカの役割と情熱、大妻学校の歴史と伝統、そして日本人の暮らしに係る歴史と文化を学内外に伝えることにより、地域社会に開かれた社会教育機関としての役割を果たすことをその設置目的としている。

ここでは、本図録に収められている「第2章大妻学校 裁縫・手芸の世界」に関する資料群の内容と、それらの収集に関する話題を中心に、大妻女子大学博物館の歩みをたどることとする。



山階宮邸内の舎宅の見取り図。ここに大正3年4月、「私立大妻技芸伝習所」を開設した

創設者たちの魂が宿る収蔵品

平成20年(2008)は大妻コタカが私塾を開設した明治41年(1908)から100周年に当たるが、その前年の平成19年(2007)の夏、旧本館の地下に山積みとなっていたダンボール箱約50個に収められていた大妻コタカの全遺品を、その年4月に当博物館の専任学芸員となった私は整理する機会を得た。これら資料は、大妻コタカが昭和45年(1970)1月3日に亡くなって以来、37年間そのままの形で眠っていた大妻コタカの魂とも言える遺品である。それらには、大妻良馬や大妻学校に関する品々も多く含まれており、現在もなお整理・研究調査・登録の作業が続けられているが、大妻コタカが直接書いたメモ書きや衣類を含む生活用具、大妻良馬の自筆の記録、大妻学校の学史に関わる貴重な資料など、大妻学校の精神を直に伝える極めて重要な品々が含まれており、これらを整理する過程で、大妻コタカと大妻良馬の建学の精神を直に感じることは一度や二度ではなかった。こうした資料群にふれることができたのは学芸員として至福の体験であったと言うほかはなく、換言すれば、大妻コタカ・大妻良馬と大妻学校の魂を、大妻女子大学博物館は収蔵していると言っても過言ではないだろう。

なお、この資料群の収められていた建物は、竣工当初は図書館棟と呼ばれ、また全面銀色の塗装から銀館とも呼ばれた建物であるが、この建物は、奇しくも大妻コタカが亡くなった昭和45年(1970)に竣工し、大妻コタカ生誕130周年に当たる平成26年(2014)に取り壊しとなった。

平成19年(2007)夏のほぼ2か月間、私はこれらすべての遺品を開梱し、黴にまみれていた衣類を洗濯し、仕分けをしていく作業を行った。この作業を通して、「博物館は大妻コタカと大妻良馬の女子教育に掛ける



「私立大妻技芸伝習所」における夏季講習会(大正4年ごろ)。縁の下には冬用の炭俵が入れられている

熱い思いを、展示を通して伝えていくことが使命である」と、あらためて当博物館の位置付けを心に刻した次第である。つまり、博物館は単にモノを展示する場所ではない。モノに含まれるコト（出来事）とそれに関わるヒトを展示する場所であり、大妻女子大学博物館は大妻コタカと大妻良馬というヒトを展示していると言っても過言ではない。そして、本図録に収められている裁縫・手芸の作品のいくつかは、この遺品資料の中に含まれていたものであり、やはり大妻コタカの思いを直に伝える資料である。

そして、開館以来、本学家政学部被服学科から各種被服の資料移管を受け博物館の収蔵品とし、また、卒業生の方々からも各種資料の寄贈を受けてきている。

大妻学院創立100周年記念企画展

平成20年（2008）、大妻学校は創立100周年を記念して盛大な式典を催した。大妻女子大学博物館でもこれに呼応し「大妻コタカ展-遺品展-」（7月19日～8月31日）、「大妻コタカ展-本展-」（9月13日～10月26日）、および「大妻コタカ展-特別展-」（11月1日～12月13日）を開催した。2010年度文化勲章受賞者で本学特別名誉教授であるドナルド・キーン氏も10月18日、本展に来訪されたが、校訓「恥を知れ」の色紙などを熱心に見ておられたことが印象的であった。

平成21年度から、「日本人のくらしの知と美」「大妻コタカの生涯と大妻教育」を常設展示し、また、企画展として「女子教育のメッカ東京」を開催した。明治後期から昭和初期に至るまで、東京には、世界に類を見ないほどの女子教育機関が次々と誕生した。東京女子医大を創設した吉岡弥生らをはじめとする錚々たる面々が日本の女子教育のレベルを世界最高水準にまで引き上げたのである。大妻学校もその一翼を担い、大妻コタカもその功労者の一人であることは言うまでもな

いが、大妻コタカ一人の努力で現在の大妻女子大学を含む大妻学校が誕生したわけではない。大妻コタカの人柄と情熱が周囲の人々を動かし、信頼を得、応援を得て、現在があるのである。と同時に、他の女子教育機関もその創設者の熱意と努力と互いの協力により、今日の日本の女子教育界の発展へと繋がってきたのである。大妻コタカは「人に恵まれた人」でもあった。

資料館から博物館へ

平成24年（2012）4月1日、「大妻女子大学生活科学資料館」は「大妻女子大学博物館」に名称変更された。当初の収蔵資料等は以下のとおりである。

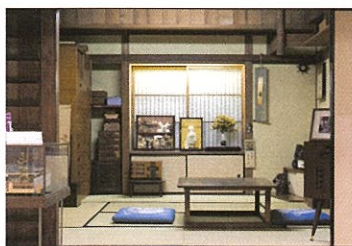
民俗資料（被服等実物資料128点・模型資料6点）／歴史資料（学史関係等資料2362点）／図書資料747点／写真資料713点／その他資料1036点

展示室面積：271㎡ / 収蔵庫面積：311㎡

また、専任助手・学芸員1名を新たに加え、本学の博物館学芸員課程の館務実習施設として実習生の受入れを開始して活動をさらに拡大した。

また、この年は大妻コタカが昭和22年（1947）「あらゆる婦人団体に相当な役割をした」として教職追放にあつて大妻学校を追われた後、亡くなるまでを過ごした自宅の一居室（八畳間）を、「大妻記念会館」から当博物館に移築し、竣工式典を4月17日に当館で挙行了。以来、「大妻コタカがお出迎えする」当館のシンボリックな存在として、来館者に親しまれている。

平成25年度は、常設展のほか、特別展「寄贈品展」として本学教員から寄贈された和服資料を展示し、また、大妻コタカと親交のあつた上田美枝が創始した「美枝きもの資料館」と共催して、特別展「大妻コタカが着用していた帯・着物展」を開催した。この時の展示物（「美枝きもの資料館」所蔵）として特記すべきものがある。それは大妻コタカが手拭いで縫った浴衣で



平成24年4月に博物館へ移築された大妻コタカの居室

ある。店の名前と電話番号の刷られたいかにも手拭い然とした手拭いを縫い合わせ、一枚の浴衣として仕上げたものである。おそらく一時間もかからぬうちに縫い上げたものではないだろうか。どのような経緯で「美枝きもの資料館」の資料となったかは定かではないが、特別展として、大妻コタカの居室に展示した際、来館者の方が「これが和裁なのよね!」と感嘆されていた。ここにも大妻コタカの精神が現されていると言うことができる。華美を誇ることなど念頭にない、大妻コタカの豊かな精神と生活が集約されている資料である。

博物館の調査研究の一端

平成25年度には、大妻学校開学当初の私立大妻技芸学校卒業生外山ハツが大正13年(1924)4月1日に、大妻コタカの承認を得て創設した函館大妻高等学校(設立当初は函館大妻技芸学校)へ訪問調査を行い、外山ハツの類稀なる刺繍の技術など大妻学校の原点をたどる際に極めて貴重な資料が函館大妻高等学校に残されていることを改めて発見した。いずれ内外に周知したい資料であることを記しておきたい。

平成26年(2014)は、明治17年(1884)6月21日生まれ(入籍は同年11月20日)の大妻コタカの生誕130周年記念に当たる年である。この年、大妻コタカの生地である広島県世羅町では、6月21日に盛大に式典を催し、花村邦昭大妻学院理事長が列席された。大妻女子大学博物館からも、大妻コタカが昭和39年(1964)4月29日に戦後第一回目の生存者叙勲として女子教育者初の勲三等宝冠章を津田塾名誉学長星野あいとともに受賞した際(大妻コタカ、数え年80歳)、秩父宮妃殿下から下賜された和服と勲章、それに受賞の証書の展示協力をさせていただき、ともにお祝いさせていただいた。

また、この年の11月1日「世羅教育の日」に再度世

羅町を訪問した時、同町にあった旧甲山町立技芸学校で当時の学生たちが制作したドレスを着装したファッションショーを世羅高校の女子生徒さんたちが披露してくれたことは驚きであった。旧甲山町立技芸学校は大妻コタカが校長として赴任することを依頼され、最終的には四国松山に赴任していた磯崎睦先生(のちの熊田睦先生)が赴任されることになったのだが、その経緯は別として、当時これほどモダンで斬新なドレスを大妻コタカをはじめとする当時の先生方が指導しておられたのだということを改めて知って驚いたのである。この世羅町にも大妻学校の原点である裁縫と手芸の作品がまだ眠っていると思われる。今後さらに、博物館として調査研究を進める必要性を感じている。

さらに、この年の3月、大妻良馬の祖先である大妻太郎兼澄公を御祭神とする長野県松本市の大妻神社における調査から、大妻コタカが昭和38年(1963)9月21日の大妻神社拝殿改築を祝し、翌昭和39年3月23日に一本の幼杉を大妻神社境内の鳥居脇に植樹している写真を発見し、忘れ去られていたその杉を特定することができた。植樹後ちょうど50年の節目に当たる年であった。そして、この年の大妻神社の例大祭(9月23日)に、大妻学校関係の方々はこの杉をご披露できたことは大妻女子大学博物館として嬉しい出来事であった。

函館大妻高等学校、世羅町(甲山中学校や世羅高等学校、大妻コタカ先生顕彰会、旧甲山技芸学校関係の方々)そして松本市の大妻神社の三箇所は、大妻学校を語る上で極めて重要な地であることをここで記しておきたい。

複合技芸としての大妻学校の裁縫と手芸

大妻コタカの裁縫と手芸の作品に関して記しておきたいことがある。それは大妻学校で教授してきた裁縫



外山ハツによる日本刺繍作品
(大正末期制作)

と手芸作品の種類とその内容である。

裁縫物としては和裁と洋裁という二大領域に区分されることはもちろんなのであるが、本図録に掲載した雛形や部分縫いも大妻学校の教育の一環として重要な位置を占めていることは言を待たず、これらも領域として独立し得ると考えられる。すなわち、裁縫にはさまざまな刺繍や刺しや縫いが施されているものもあるので、裁縫と手芸を峻別することはできないとも言える。資料分類・登録の悩みの部分でもある。なお、雛形については、雛形の創始者、渡邊辰五郎（現、東京家政大学創設者）の子息、渡邊^{しげる}氏からも大妻コタカはいろいろと教示を受けており、この点についても今後の調査が必要であると考えている。

手芸に関しては、その内容として、刺繍・刺繍レース・レース編み・ビーズ織り・マクラメ編み・つまみ細工・押絵などのほか、染め・織り、といった区分も可能であり、一概に手芸あるいは技芸と言っても、その分類は学芸員にとって頭の痛い作業であることをここで記しておきたい。

そして、さらに、大妻学校で教える技芸には伝統に縛られる枠はないということの特記しておく。大妻コタカは「前進することが伝統を生かすことである」と述べている。大妻コタカは明治35年（1902）9月、コタカ18歳（数え年）の時に上京して、当時の東京私立和洋裁縫女学校に入学して洋裁を修めるが、その際、課題のほかに必ず一点自分で工夫した作品を提出したと言われている。大妻コタカは「工夫の人」でもある。この精神は大妻学校の教育方針の随所に垣間見え、大妻学校の作品はさまざまな技法を組み合わせる一つの作品を作り上げるという大妻学校ならではの複合技芸の特徴を持っている。これは大妻コタカの工夫の精神の具現化されたものと見ることができる。

資料調査の整理過程にあるため、本図録には割愛した手芸にビン細工がある。現在も趣味の一つとして愛好されているが、大妻コタカは、大正6年（1917）、実業学校として認可された私立大妻技芸学校の正課にビン細工を取り入れている。もともとビン細工は限られた技芸家により口伝で伝えられてきたものであり、これを大々的に公開したのは大妻コタカが最初であると言われている。つまみ・縫い・刺し・ビーズ・水引等を組み合わせ、さらに蓋に塗りを施した、創意と工夫にあふれたビン細工も、まさに複合技芸を標榜した大妻技芸の特徴であろう。

21世紀を見据えて

大妻学校は、建学の精神を新しい時代の流れの中でとらえ直し、平成20年（2008）の学院創立100周年を期して、その教育理念として「関係的自立」を掲げ、大妻コタカの実生活に根差した人間関係の豊かさを育む大妻教育を卒業までの目標（ディプロマ・ポリシー）とした。

大妻女子大学博物館も、その教育理念に沿って、各種資料の調査研究・展示公開活動等を行い、関係的自立のできる女性の育成に貢献したいと考えており、さらに、博物館として在学生はもとより、地域社会の人々に対して、大妻学校の女子教育に果たす役割や大妻コタカの思いを伝え、また日本人のくらしの知と美を発信して、社会教育機関としての役割を果たしていきたいと考えている。

21世紀社会に求められるのは、生涯に亘り学べる場としての社会教育機関であり、学生のみならず一般の方々のキャリア形成に資することができる新たな機能を提供できる成長の場として、また、シニア世代の新たな学び直しができる生涯学習の場として、さらに質の高い情報提供を心がけていきたいと考えている。



大妻女子大学博物館展示室

沿革

平成19年度（2007年度）

「大妻女子大学生生活科学資料館」として、「日本人のくらしの知と美」をテーマに活動を開始（4月1日）
大妻学院より大妻コタカおよび大妻学校関係資料等、約5000点の寄贈を受ける



平成20年度（2008年度）

学院創立100周年を期して、「大妻コタカ展-遺品展-」（7月19日～8月31日）、「大妻コタカ展-本展-」（9月13日～10月26日）、および「大妻コタカ展-特別展-」（11月1日～12月13日）を開催。2010年度文化勲章受賞者で本学特別名誉教授ドナルド・キーン氏が本展を来訪（10月18日）

「生活科学資料館」としてのホームページを立上げる

地下3階収蔵庫の収納棚設置、地下1階研修室のガラス黒板センサー設置、大妻コタカの生家復元模型、地下3階収蔵資料の燻蒸など、設備拡充と収蔵品の管理を進める

議決機関として運営委員会を設置し（委員長は大場幸夫館長）、その下部組織として作業部会設置等により運営組織を確立
博物館相当施設（登録施設）としての認可申請に向けての検討開始

平成21年度（2009年度）

常設展として「日本人のくらしの知と美」「大妻コタカの生涯と大妻教育」を開催（4月1日～翌年1月31日）

企画展「女子教育のメッカ東京」を開催（4月1日～7月31日）

平成22年度（2010年度）

企画展「くらしのなかの たたむ 日本人のくらしに見られる-たたむ技-」を開催（8月15日～12月18日）

特別展「ジャワ更紗-手仕事の美しさ-」を開催（7月15日～31日）

大型スキャナーの購入、展示室用監視カメラの設置など、設備等の充実を図る。相当施設認可に向けた資料整理関連予算の執行

平成23年度（2011年度）

企画展「くらしのなかの むすぶ 日本人のくらしに見られる-むすぶ技-」を開催（8月4日～12月17日）

東京都教育庁から博物館相当施設として認可（2月21日）

平成24年度（2012年度）

「大妻女子大学生生活科学資料館」から「大妻女子大学博物館」へ館名変更（4月1日）。同時に博物館学芸員課程の館務実習施設として実習生の受入れを開始

大妻コタカ居室を大妻記念会館から移築（竣工式典4月17日）

企画展「くらしの生活にみられる-すわる-」を開催（8月16日～12月22日）

多摩校舎に展示ケースを設置

平成25年度（2013年度）

企画展「くらしのなかの しゃれる 日本人のくらしに見られる-しゃれ-」を開催（8月15日～12月21日）

特別展「寄贈品展」、および美枝きもの資料館と共催で「大妻コタカが着用していた帯・着物展」を開催（8月15日～12月21日）

大妻女子大学博物館主催「大妻女子大学博物館収蔵資料解説・第1回（大妻コタカのふるさと関連資料）」を開催（9月28日）

平成26年度（2014年度）

企画展「くらしのなかの-ゆずる-」を開催（8月20日～12月20日）

特別展「寄贈品展 PART II ～羽織り物～」を開催（4月9日～8月9日）

大妻女子大学博物館主催「大妻女子大学博物館講座・大妻神社について（現地解説）」を開催（9月23日）

大妻女子大学博物館主催「大妻女子大学博物館収蔵資料解説・第2回（大妻神社について）」を開催（11月15日）

博物館事務室設置（10月1日付）

平成27年度（2015年度）

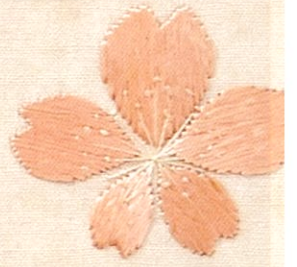
特別展「大妻学校の原点-手芸」を開催（4月8日～8月8日）

大妻女子大学博物館主催地域連携講座「学生と共に伝える博物館の見方・楽しみ方」講座を開催

（10月31日・11月6日・11月7日・11月13日・11月14日・11月20日・11月21日）



ひら
ら
繡



ひら
かさ
ね
繡



第 2 章

2

大妻学校

裁縫・手芸の世界



く
さり
と
め
繡



す
が
繡



あ
じ
ろ
繡



さ
が
ら
繡



バ
ス
ケ
ッ
ト
繡



さ
し
繡



わ
な
さ
し
繡



手芸作品に見る大妻コタカの生活哲学

大妻学院理事長 花村邦昭

大妻コタカは教育の基本に「有為の日本婦人の養成」を掲げ、教育の原点に「実技実学」を据えた。その根底には〈女性のすべての生活局面が創造的生産活動であり、女性こそが真の精神的・文化的価値の生産者である〉というコタカ流の「生活哲学」がある。つまり、「より明るい生活の創造が生活の本義であって、衣食住に関するすべては婦人の手数をかけて初めて明るい生活にまで持ち来たらされる」という生活信条である。

では、その〈精神的・文化的価値生産〉に求められるものは何か。「熱心な研究心と、周到な洞察力」、そしてそれを裏打ちする「有言実行」の実践哲学、それがコタカの答である。「私の今日を築いてくれましたのは、有言実行型と申しますか、言ったことは必ず実行するという主義で、責任を持ち、人の嫌がる仕事はまず自分でやり、その中から人間学を学び取るということ、モットーとしておりました」(昭和29年1月放送)。

「研究心」、「洞察力」、「有言実行」、この三つが交叉する生活局面でコタカの「手芸哲学」が花開く。まず、コタカの言を聴こう。「手芸はどんな大きな、むずかしい手のこんだものでも、一つずつ積み上げて行かねば

ならない。したがってしらすらずしらすらず勤労の習慣がつく。なお手芸は最後の仕上がりを楽しみに一心不乱に努力を続けて行かなくてはならない。手早く仕上げてしまうことも、手を抜くことも、仕上がりを悪くする。一步一步落ち着いて仕上げなくてはならない。このように手芸の実習は女子には殊に大切な落ち着きをしらすらずの中に養うものである。また、自分で苦心して作ってみてはじめて、ものの値打ちがわかるもので、手芸をやっている中に、僅か一本の糸でもそれを有効に使えば、花となり葉となり、決して無駄にできないことをさとする。それに他人の作ったものに対しても、その苦心や勤労に十分同情が出来、心から感謝することが出来るものである」(昭和6年6月『婦人倶楽部』)。「手芸に熟達しますと自ら新しい種々の考案をするようになりますから、ただ徒に模倣するだけでなく独創力を養い、なお一面に自分の生活内容を美化し、また充実させるのに最も役立つものであります」(昭和14年『母の手芸』)。それだけではない、手芸は子どもの情操教育上も必要不可欠である。「うちのお母さまは何でも自分達の着る物や持つ物を作って下さるといふ、心の誇りは、何といっても子供の幸福の一つでございます。母



草創期の手芸作品展

の高い趣味によって選ばれ、作られた製品の数々が、お子様の情操教育上、この上ない成果を示すものであることは申し上げるまでもございます。優しい心のもった、母の贈り物の方が、市販の物より子供達にとって何倍か嬉しいこととございましょう」(『母の手芸』)。

手芸は母その人の人間的成長に資するだけでなく、母・子のあいだの愛の絆を強める縁となり、子どもの情操教育にもその実が及ぶ。それだけではない、手芸の作業工程は人が「仕事」をする上での基本にも通じる。どんな「仕事」でも基本手順は同じなのである。①まず、構想する、②次いで、材料を集める、③設計する、④創意工夫する、⑤作業工程を決める、⑥必要な道具を揃える、⑦制作する、⑧出来栄を評価する、それはまた、次の①新たな構想に繋がる。まさに〈P-D-C-A〉サイクルの繰り返しである。この操作を繰り返す中で、人はますます「仕事」に習熟していく。これは現に私たち皆が「仕事」の上で日常的に行っていることである。コタカは正面切って「手芸哲学」を論じた文章を残しているわけではないが、手芸を通じて「もの作り」の本質を教えているのである。し

かもそこには深い「人生哲学」も盛り込まれている。「手芸には各自の性格が現れます。制作の過程において、たとえば針の運び方、糸の使い方によって、よく作者の気持ち、性格を味わい得るものであります。技巧の巧拙は暫くおいて、着想、配色、手法の選択等によってよくその人の性格を伺い知ることができるものです。無声の手芸作品は日常の言行のその奥まで、一点蔽うところなく観衆の前に雄弁に自分を物語るものであります。ゆえに、私どもは日常修養に努め、長所を引き伸ばすことに努力いたさねばなりません。そうすれば作品もまたおのずから立派なものになります。どうか、それがもつ真の実質によって作品の価値も定められるものであることを忘れず、創造性の涵養と趣味の向上のためにますます努力せられんことを望みます」(昭和27年7・8月『現代乃婦人』)。

そして、昭和12年8月開催の「第七回世界教育会議」で発表者に選ばれたコタカは、「今後の学校教育の場においては、美術・教養教育の一環として、創意工夫、工夫創作に重点を置いた手工芸教育がもっと重視されるべき」ことを強く主張して、満場の出席者から熱い共感を得たのであった。



専門部手芸実習。昭和10年ごろ

裁縫

雛形

^{ひながた}雛形は、東京家政大学の創立者である渡邊辰五郎が明治7年(1874)ごろに考案したものである。限られた時間と少ない材料で、さまざまな種類の衣服の縫い方を習得するために考え出された方法で、実物を縮小して製作する。裁縫教育において、技術と知識を身に付けるこの方法は、大変有効なものであった。雛形を完成させた学生は、製作物の裏に名称、製作年、氏名などを「墨書」で記入し教員に提出、教員の点検を受けて合格するとその印が押され、学生に戻された。

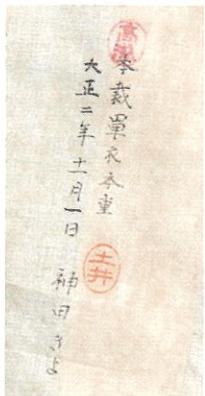
技芸学校から始まった大妻女子大学では、和裁はもとより洋裁、手工芸を幅広く学生に教授していた。大妻コタカは、自ら東京裁縫女学校(現、東京家政大学)を訪れて雛形の製作方法を学び、その知識を学校教育に還元させた。現在、大妻女子大学博物館には、卒業生の多様な雛形の作品が収蔵されている。



01 本裁単衣本重

幅42.5cm×縦55.0cm

単衣重は夏季の礼服として用い、本重の仕立ては上着と下着の二枚重ねになっている。主に紵や紗など、透けている生地を仕立てる時に用いられる。比翼は、留袖など格式の高い着物に白羽二重で仕立てた着物を重ねる。現在では簡略化した付け比翼を用いる。





ほんだちひと えはんがさね
02 本裁単衣半重

幅46.0cm×縦55.5cm

半重は、上着に下着部分を腰回りから下の裾に付け、胴部分は上着一枚となっている。さらに、衿と袖にも下着部分となる裏を付ける。本重同様に夏季の礼服として用いる。



うちかけみつがさね
03 打掛三重

幅42.0cm×縦54.5cm

一見地味な布遣いに夜着のように思われる。しかし、仕立てを見ると着物の共布を裾回し・衿など要所に用いた下着2枚を重ねている。本来なら豪華絢爛な着物となるどころ、身近な布を使用したことで、その豪華さを失っている感もあるが、この雛形からコタカのもったいない精神や技術を身に付けるという目的意識が表れている。なお、この仕立ては浮世絵の美人画にも見られる。



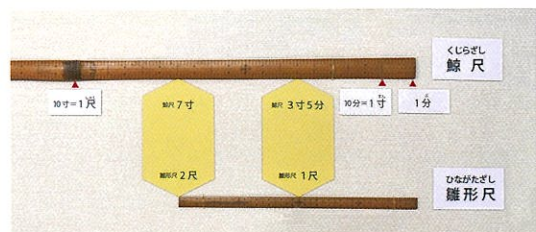
ひと みひと えいわいぎ
04 一つ身単衣祝着

幅28.0cm×縦32.0cm

この祝着には、背守りと紐飾りが縫い取られている。一つ身(0~3歳用)のお宮参り着には背守り縫いを付ける習慣があった。裾から身丈3分の1のところを縫い始めとし、衿付けの1cm5mm下まで7針縫い、それから斜めに5針、合わせて12針縫う。これは、1年の月数になぞられたものだと言われている。普段着では、背紋飾りを縫い付け、紐飾りはまだ兵子帯を締めない幼児の付け紐に付ける。

雛形尺

物差しにはメートル尺・曲尺・鯨尺がある。曲尺は和裁でも使用するが主に建築用として、鯨尺は江戸時代布地の長さを測るのに用い、以来和裁ではこの鯨尺を主に使用している。この鯨尺実寸法を3分の1に縮小したのが雛形尺である。雛形尺を使用することで、縮小のための煩雑な計算をしなくとも簡便に雛形を仕立てることが出来るようになった。なぜ、雛形尺が3分の1かというと、当時布に用いる前に紙を使用、この紙が美濃紙といって半分に切りそろえたとちょうど反物の3分の1の幅だったため、雛形尺を鯨尺の3分の1の長さとした。



東京家政大学博物館所蔵 (複製禁止)



おとこばかまじゅうぬのつかい
05 男袴十布遣

幅18.5cm×縦28.0cm

男袴の仕立ては、履いた時に襷がすっきりと、また歩行のたびごとに動きが美しい線を描くように仕立てる。十布遣は、前マチを布幅いっぱいにするため男袴の中で最も幅広く仕立てることができ、体格の良い人でも襷が深く取れ、着装した時に風格が出る。



かいらようがたおんなばかま
06 改良型女袴

幅23.2cm×縦28.7cm

女袴は通常筒型（スカート型）になっているが、この改良型女袴は、基本的仕立ては袴ではあるが、内股部分を縫い合わせた山袴の一種となっている。



かいまき
07 掻巻

幅28.0cm×縦34.5cm

掻巻は、綿が入り着物の形をした夜着の一種である。夜着は、大きさと綿の厚さで大夜着、中夜着、小夜着の区別があるが、小夜着と形と作り方は似ているが、燵（袖下と脇の角に、ゆとりを出すために付ける三角形のまち）を付けないものを掻巻という。



つりがねがた
08 釣鐘型おくるみ

幅28.5cm×縦31.0cm

新生児からおよそ6か月くらいまで、乳児を抱く時に衣服の上からくるむもの。仕立ては、掻巻の袖のない作りで、衿は直接身頃に縫い付けるため釣鐘型になっている。



09 ワンピース

幅33.3cm×縦26.0cm

東京家政大学で所蔵している明治38年（1905）に仕立てられたワンピースと同型で、フリルやレースを使い装飾的である。麻民はまだ着物を着用することが多い時代だったがいち早く洋裁を取り入れている。このワンピースは現在でも着ることができそうなデザインで、雛形が日本のファッションの最先端を担っていた様子がうかがい知れる。



10 セーラーカラーシャツ

幅36.5cm×縦29.0cm

セーラーカラーは、水兵服の角形の衿の形を言う。19世紀中ごろイギリス海軍の制服として用いられた水兵服は、のちに日本では子供服や女性のファッションに取り入れられ世界的に流行した。



11 シャツ 12 ズボン

シャツ：幅29.0cm×縦20.0cm

ズボン：幅15.5cm×縦18.5cm

東京家政大学で所蔵している明治41年（1908）に仕立てられた運動シャツとズボンと同型である。子供服で、学校の制服として、また体操着として、着心地や機能性の良さにより取り入れられていたものを雛形として製作した。

部分縫い

部分縫いは、主要となる部分を抽出し、仕立てや始末の方法を学ぶために行われる。特に和裁では、その要所要所で高度な技術が要求されるため、あらかじめその重要な部分を理解し、実際に仕立てる際の技術を身に付ける必要がある。例えば着物の場合、袷袖の袖口ふき・丸み、裾の裄上げが難しく、訓練が必要である。また、コートや衿にはさまざまな種類があり、仕立てる上で衿部分の知識と技術の理解が必要となる。学生は、どの部分が注意される場所なのか、また、最も目に付き仕上がり美しく見えるのかを、この部分縫いを通して学ぶ。

おんなものあわせはん み ころ
13 女物袷半身頃

幅36.0cm×縦22.0cm

衿付け・衿先・衿下・裾ふきの部分縫いである。女性用の衿は、広衿やバチ衿に仕立てられるが、男性用は棒衿仕立てで、それぞれの衿付けや衿先の始末には違いがある。この部分縫いは女性用バチ衿始末が行われ、また衿下・裾へと続く作りになっている。



おんなものあわせそで
14 女物袷袖

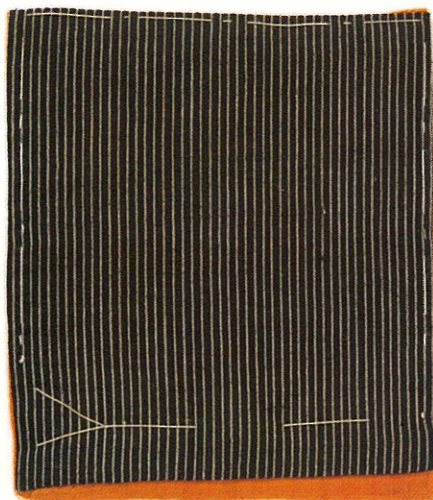
幅26.5cm×縦14.5cm

女物の袖は、袖付けから袖下まで振りを付ける。袷袖口には、5厘幅でふきを出すのが女物の特徴である。この袖部分縫いでは元禄袖丸み仕立てにしている。着物の袖は、最も目に付く部分であり、ふきや丸みの始末は難しい。

あわせそで
15 袷裾ふき

幅16.5cm×縦14.0cm

衿下から裾ふきの部分縫いである。裾ふきは、袖ふきより太めの一分幅で出すが、裾袷後のふき部分は約1m40cmの長さになるため同じ幅で仕立てるには訓練が必要である。また、昔はよく「上手に裄が上げられないと良い妻になれませんよ」と言われたりもした。





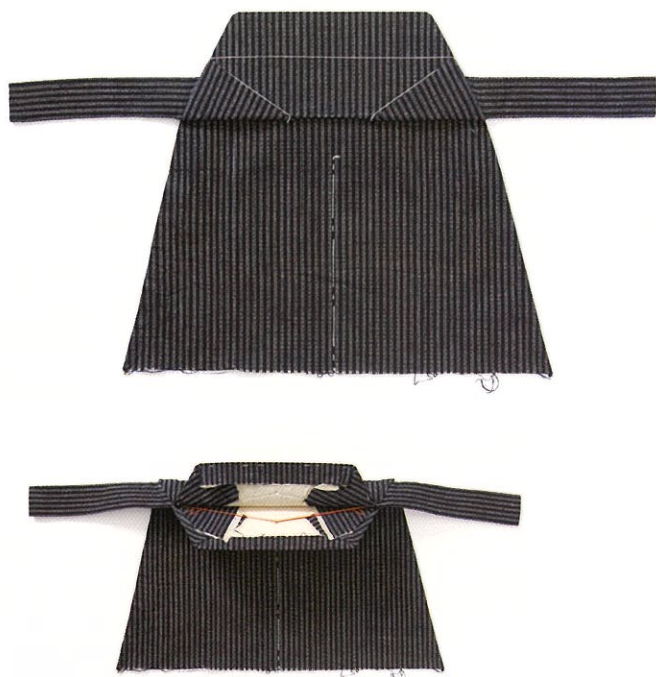
あわせ は おりほん み ごろ
16 裕羽織半身頃
 幅48.0cm×縦62.0cm

羽織衿・マチ・前下がりの部分縫いである。羽織の衿は、反物の幅いっぱいをもとに量み方で量み縫い付ける。衿量みの方法と縫い付けは、前身頃と後身頃の間を挟み込むようにマチを付け、前身頃は後身頃より長くなる前下がり部分を付ける。



みちゆきえり
17 道行衿
 幅35.0cm×縦54.0cm

コートの衿の形にはさまざまあるが、道行衿が最も一般的に仕立てられる衿型である。この部分縫いは、上前の前立衿から縦衿下がり・小衿と続き、片身頃の主要部分を網羅している。身頃や袖は、着物の仕立てとは大きい違いはないが、縦衿と特に衿付けは重要な部分である。



おとこものはかまうしろこしいた
18 男物袴後腰板
 幅51.0cm×縦28.0cm

男袴と女袴の大きな違いの特徴の一つは、腰板である。男袴の腰板は、最も目に付く部分であるため技術の巧拙さが表れる。そのため作り方の確認と技術を身に付ける部分縫いを通して練習を行った。



まえみごろ そでぐらうちかけ
19 前身頃・袖口打掛
 前身頃:幅21.0cm×縦50.0cm 袖口:幅18.0cm×縦31.7cm

左が裕半身頃、右が袖である。身頃の仕立てでは、全体に薄く綿が張られ、裾にはたっぷり綿が入れられ、出ふきの幅は通常の着物の3倍に仕上げている。袖口にも綿が入れられ、裾ふき同様にふくらとした仕上がりである。このような仕立ての特徴は、打掛など祝着に用いられる。

基礎縫い

裁縫の基礎となる運針の練習を習い始めの初期に何度も行い、正しい姿勢を身に付け、針目が美しく整うようになると、シーチング等を用い、縫い方・紝け方・しつけのかけ方など、名称付きで各種の縫い方を縫い付けた「基本縫い標本」を作製した。当時、書籍など印刷物が貴重だったこともあるが、学生が自ら標本を作製することで、基本縫いを身に付けるためと、作品の制作にあたって縫い方の確認等を行うために有効であった。また、刺繍の基礎縫いも同様に、それぞれのステッチとともに名称があり、手芸の基礎を学んだ。



20 縫い方標本

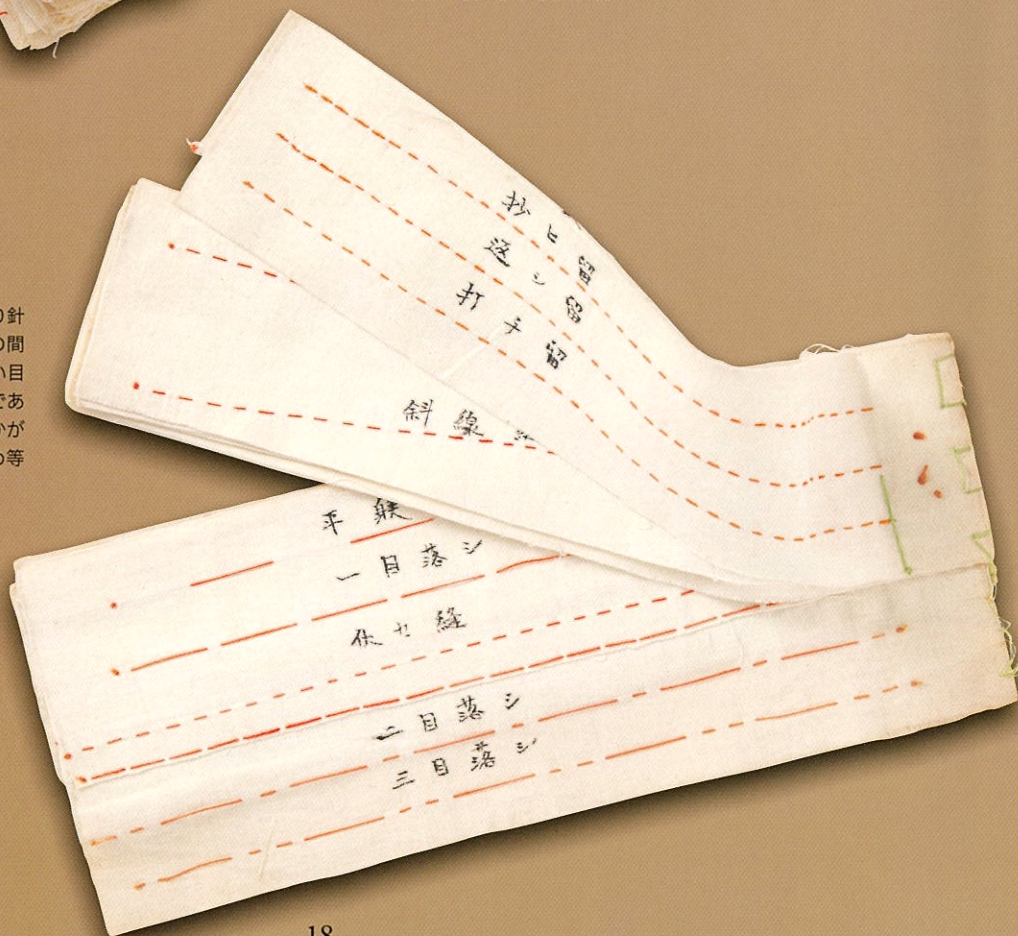
幅25.0cm×縦9.5cm

すべて手縫いで行われる和裁は、さまざまな縫い方が使われる。並縫いはもちろんであるが、衿の折縫いと単衣物の裾の折縫いでは縫い方に違いがあり、単衣物の脇縫いの始末には耳縫いを使用する。このように、それぞれの部分によって縫い方に違いがあるため、標本を作り、縫い方とともに名称を学んだ。

21 縫い方標本

幅31.0cm×縦13.0cm

直線的な縫い方も、並縫いから始まり針目を長くしたもの、また、長い針目の間に短い目を一つ落とす一目落し、短い目を二つ落とす二目落しなどさまざまである。そのほかにも留め方・紝け方・かがり方など、和裁で使われる縫いや留め等を網羅している。



※「標本」とは、初心者である生徒が技法習得のために練習した課題製作品。



22 刺繍見本 (上)
幅49.5cm×縦45.0cm

46種類の欧風刺繍ステッチをまとめた見本である。欧風刺繍の基礎的な技法と、特に家庭用品や子供服の装飾に適した模様の技法を取り上げている。ステッチ名と枠線は木綿地に印刷されており、学校で配布されたものと見られる。

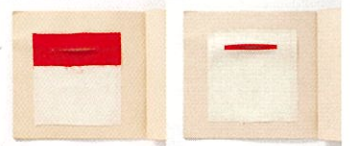
23 刺繍見本 (下)
幅36.0cm×縦26.7cm

本作品は裏書から昭和13年(1938)に学生が製作したことが分かっている。この学生は卒業後、本学の教員として後進の指導にあたった。丁寧に刺された刺繍の縫い目は正確で端正であり、品格を感じさせる。日本刺繍と欧風刺繍の両方を一枚にまとめているのは、短期間で刺繍技法を学べるように工夫したものと考えられる。



24 玉縁ポケット標本

基礎縫いの標本には、布を束状にしたものと、それに表紙を付けて冊子状にしたものがある。この標本は後者の形で、綴じ紐は紙縫いを使用している。標本はボタンホールやポケット口などが作製されている。今ではボタンホールをミシンで縫い付けるが、当時は手縫いで作ったので単にかがる縫い方とは違うかがり方を学ぶため、また和裁でもコートにはポケットを付けるため、ポケット口の作り方は重要な部分となる。



※「見本」とは、教員が学生に見せる教材として製作したもの。当館資料記録では、「標本」と記されているが、あきらかに「見本」と見られる作品もある。

手芸

刺繍

江戸時代に技巧、美的表現ともに極めた日本の刺繍は、明治時代には海外文化の影響を受けてさらに発展し、日本を代表する染織作品として高く評価された。この流れを受け、刺繍は女性の自立を助ける新しい職業として期待され、明治時代の女子教育に盛んに取り入れられた。大妻技芸学校においても刺繍教育は重視され、創立期から独立した学科として刺繍科が設けられた。学科では基礎科から高度な技法を習得する研究科まで充実したカリキュラムがあり、多くの学生を輩出した。

日本刺繍

日本刺繍は、柔らかな「釜糸」と呼ばれる絹糸に撚りを掛け縫い進めていく、非常に工程の多い伝統技法をもつ刺繍である。大妻の日本刺繍は、絵画的図案の作品のほか、吉祥模様などの華やかな図案を、袋物や小間物などに刺したものが多い。



ひょうほん 25 標本

幅26.0cm×縦35.0cm

日本刺繍の技法をまとめた標本である。片切縫、組縫、ほかし縫、さし縫、むしろ織縫、十字縫の5種類が紹介されている。さし縫は、刺し目を模様の輪郭に揃えて、内側の針目は揃えず刺し埋める技法で、ここでは艶やかな椿の花びら部分に使用されている。横に渡した糸で筵のような面を表現するむしろ織縫など、古典的な日本刺繍技法を集めている。作品の中左下の「應用図案縫方自由」では、鸚鵡の姿を主にさし縫によって鮮やかに表現している。鳥の図案は、絹糸刺繍に適しており、特に羽部分の表現では刺し手の技量を示すことができるため人気であった。



26 べにしおぜ ちおうか ごしよぐるます さいふひょうほん 紅塩瀬地桜花御所車図財布標本

幅12.4cm×縦8.5cm×厚1.5cm

紅塩瀬地に御所車と桜を表現した、若い女性が持つのにふさわしい華やかな作品である。御所車は細い甘摺りの絹糸の艶を活かすように丁寧に刺されている。



27 しろしおぜ ちばいか ずししゅうほこせこ 白塩瀬地梅花図刺繍管迫

幅12.3cm×縦8.5cm×厚1.5cm

白地に淡い梅の花を刺繍した管迫である。梅の花は一輪だけめしべが縫われ、ほかは淡いピンク色の濃淡のみで表現されている。シンプルな図案と控えめな装飾が楚々とした初春の風情を感じさせる。



28 べにいろちりめん ちばいか もようきん ししゅうかみい ひょうほん 紅色縮緬地梅花模様金糸刺繍紙入れ標本

幅21.3cm×縦11.5cm×厚2.3cm

鮮やかな紅色の地に、金糸で縁取られた梅の花が映える紙入れである。シンプルで大胆な梅の花の図案は、若い女性の新春の装いにふさわしい品である。



29 もえぎ いろねりぎぬおうぎばい か ずかがみかけ 萌黄色練絹扇梅花図鏡掛

幅28.5cm×縦53.4cm

落ち着いた萌黄色の練絹地に、菊、竹、梅の花、扇の輪郭線を刺繍した鏡掛である。太めの糸で大らかに表現された植物図案が厚みのある絹地と相まって、柔らかな雰囲気を作り出している。古くなった帯を再利用して、鏡掛として作り直したものと見られる。

欧風刺繍

欧風刺繍は、フランス刺繍、イギリス刺繍、北欧刺繍などの西洋的な刺繍の総称である。明治時代にミッション系女子教育に取り入れられたが、大正時代に入ると西洋的な服飾品の装飾技法として一般に広まった。当館には、テーブルクロスやクッションなどの室内装飾品に施された欧風刺繍作品が所蔵されている。



30 茶地花柄テーブルセンター 標本
幅42.0cm×縦72.0cm

粗めの茶色地に、白と水色を基調とした花柄を欧風刺繍で表現したテーブルセンターである。大きな花模様を鮮やかな刺繍糸で丁寧に刺しており、構図、色彩バランス、技法の高さ等、全体的に整った秀作である。作風から昭和時代の作品と考えられる。



31 テーブルクロス
幅88.8cm×縦75.5cm

白地に緑とオレンジ色の幾何学模様のボーダーが正確に刺繍されている。周囲のフリンジも可愛い。単純な模様だけに確かな技術が必要である。欧風刺繍は、こうしたテーブルクロスやテーブルセンターなどに施されることが多かった。



32 牧歌図クロスステッチ
幅104.0cm×縦65.0cm

クロスステッチとは、専用の布地に糸を斜め十字に刺していく技法で、日本では戦後に流行した技法の一つである。技法は単純であるが、図版や色合いによって見栄える作品となる。本作品は、青空と牛飼いの牧歌的な風景を丹念にステッチしている。

刺繍レース

刺繍レースとは、刺繍した布地を部分的に切り取ったり、繋ぎ合わせたりして制作する技法で、「エンブroidリーレース」、「ドロワーク」とも呼ばれる。布地部分が残されることが多いが、布地が見えないように刺繍で覆い尽くす作品もある。大正時代には「ハーダンガー刺繍」や「バテンレース」などの刺繍レースが一般に広まり人気となった。当館にも刺繍レースの現存作品が多く、レース制作が熱心に行われていたと見られている。

ドロワーク・ハーダンガー刺繍

ドロワークとハーダンガー刺繍は、布をかがって透かし模様を構成したり、織り糸を束ねるなどして幾何学模様を作る刺繍レースである。大妻女子大学家政学部被服学科では、現在もハーダンガー刺繍がカリキュラムに取り入れられており、大正時代から続く伝統が守られている。

33 ドロワーク標本

幅42.6cm×縦21.2cm

ドロワークの基礎的な技法をまとめた標本である。透かし模様は、周囲を細かくかがって不要な箇所を切り取るか、生地から糸を抜いて残った糸を束ねてレース模様を作り出している。丁寧な細かな作業によって、規則正しい模様が作り出されている。



34 ハーダンガー刺繍手提げバッグ

幅28.2cm×縦29.2cm(把手含む)

子供用と見られる手提げバッグに、黄色と緑色の刺繍糸でハーダンガー刺繍がされている。両脇の花柄のような模様が可愛い。ハーダンガー刺繍は、布地を多く残せば強度が保てるため、子供服や実用的な家庭用品に取り入れやすかった。

35 緑色菱型模様ハーダンガー刺繍クッションカバー

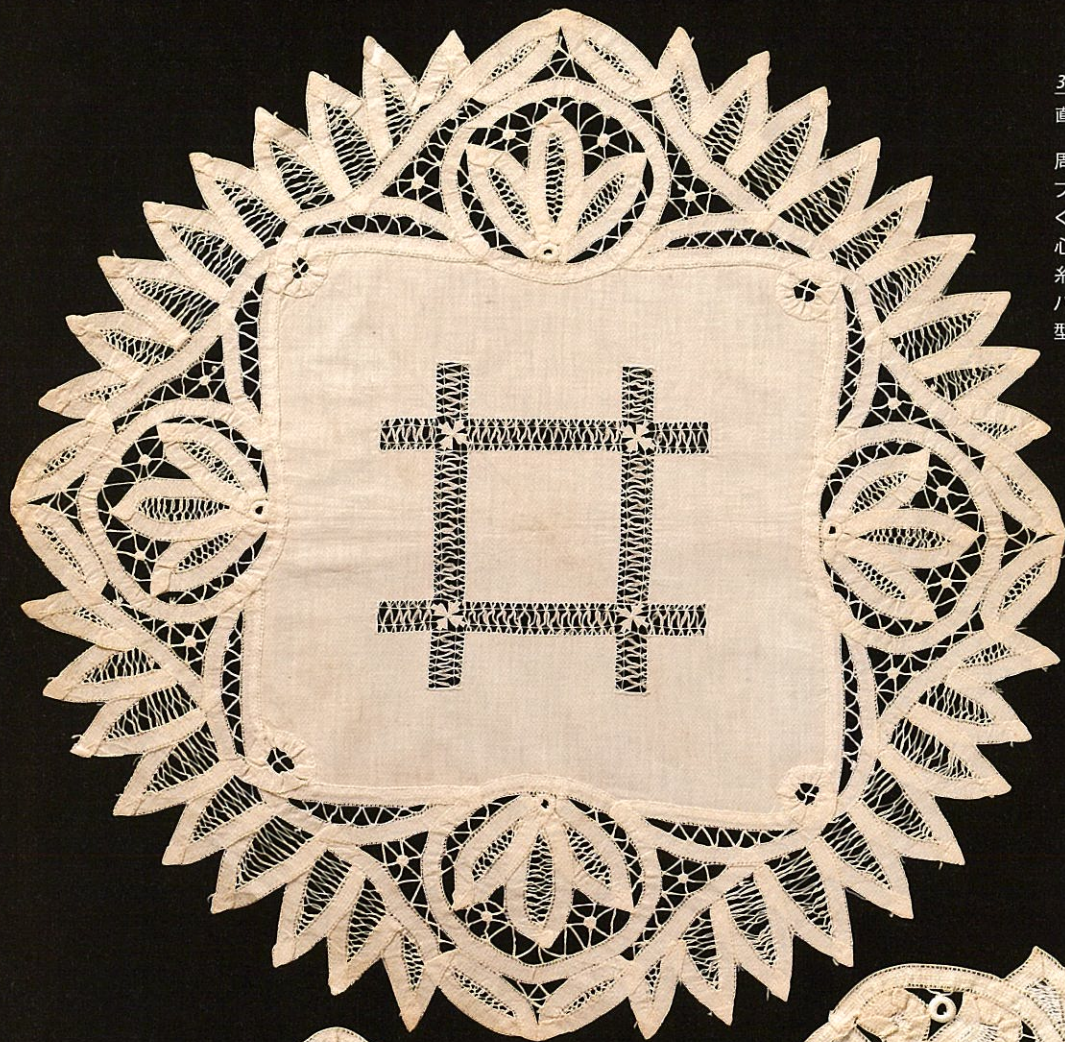
幅50.5cm×縦50.0cm

薄手の白麻地に幾何学模様を刺繍した華やかな作品である。ハーダンガー刺繍とフランス刺繍の組み合わせと、白から緑色にグラデーションで変化する糸が豊かな表情を作り出している。居間を飾るクッションカバーに適した柄である。



バテンレース

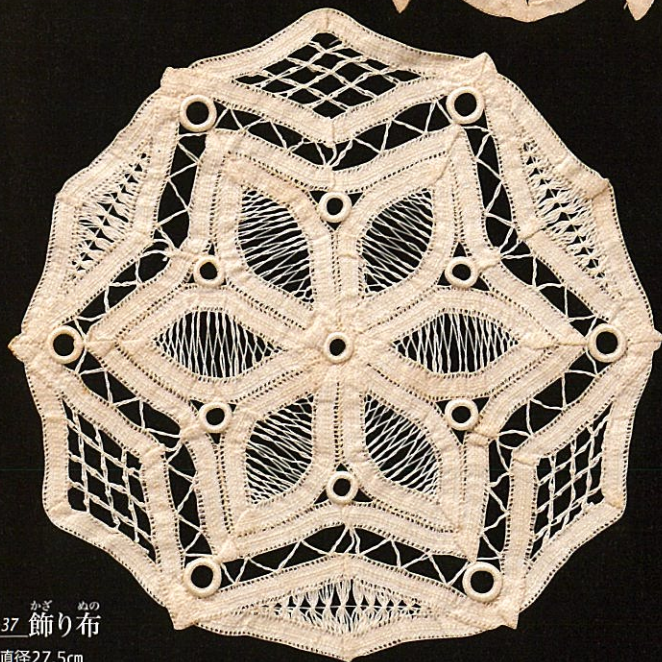
市販のテープ状のコードを型紙に固定し、糸でかがって模様を作る刺繍レースの一種である。欧米では19世紀ころに人気となった。テープの組み合わせによって豪華なものから華奢な作品まで制作できるのが特徴である。当館にはバテンレースの作品が多く、種類も多彩である。



36 テーブルセンター

直径60.0cm

周回の葉型の飾りが華やかなテーブルセンターである。テープを繋ぐ刺繍ステッチが整っており、中心の布地に施された透かし部分の糸も規則正しい端正な作品である。バテンレースの特徴を活かした典型的な作品である。



37 飾り布

直径27.5cm

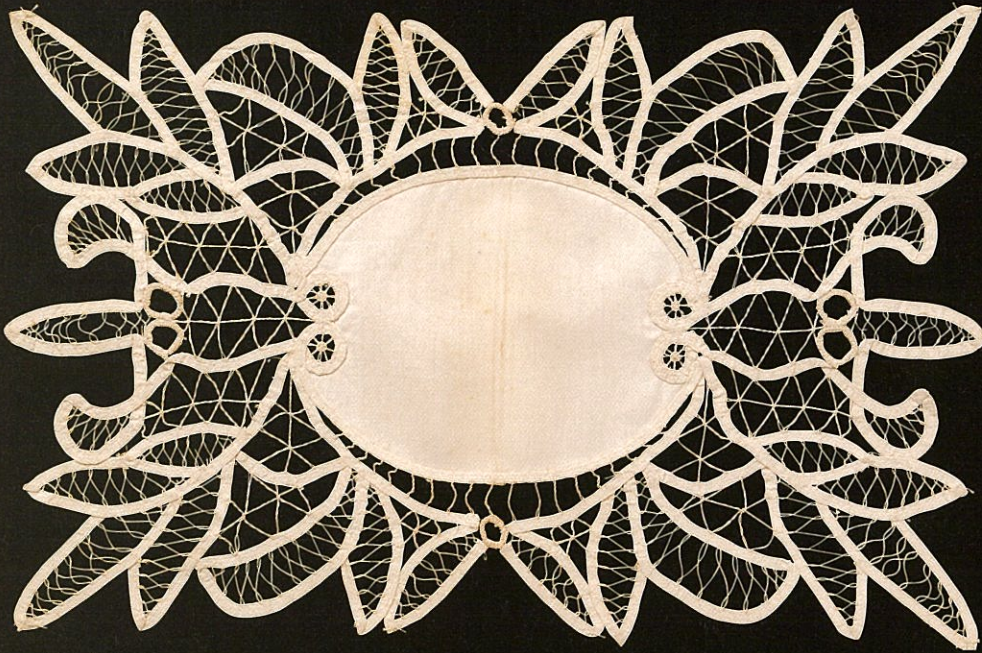
星型六角形のバテンレースである。丸型の飾りがアクセントとなっている。このような小さな飾り布は、手軽に作れるために初心者から上級者まで人気があり、花瓶敷や額装されることが多かった。



38 飾り布

幅30.0cm×縦30.0cm

テープの繋ぎ方が凝った作品である。透かし部分は少ないが、テープの組み合わせ方が装飾的で、大きな葉のようなレース模様が印象的である。刺繍ステッチが細かく、作り手の熱意が感じられる。



39 ^{かざ} ^{ぬの} 飾り布

幅41.0cm×縦28.0cm

透かし部分の華やかなレース作品である。通常よりも細いテープを使用し、繊細な技法で繋いでいる。透かし空間が大きい作品のため、優れたバランス感覚と高度な技術をもった上級者による作品であると考えられる。



40 ^{かざ} ^{ぬの} 飾り布

幅58.0cm×縦48.5cm

薄手白麻地の周囲をバテンレースで飾った豪華な作品である。艶のあるテープが絹のような光沢を生み出し、渦巻き模様と葉型模様の組み合わせが存在感を生み出している。当館所蔵のバテンレースの中でも最も華やかな作風である。

ネットレース

41.42 ^{ちょうもよう} ^{ずあん} 蝶模様 ハンカチーフと図案

幅40.5cm×縦41.5cm(図案 幅47.7cm×縦47.5cm)

薄ピンク色の花を中心に、紫色の蝶を四方に飾ったネットレースである。やや粗めのチュールの上に刺繍糸で刺繍されている。また、実寸大の図案(左)も所蔵されており、学生が自ら描いた図案を元に制作したことが分かっている。



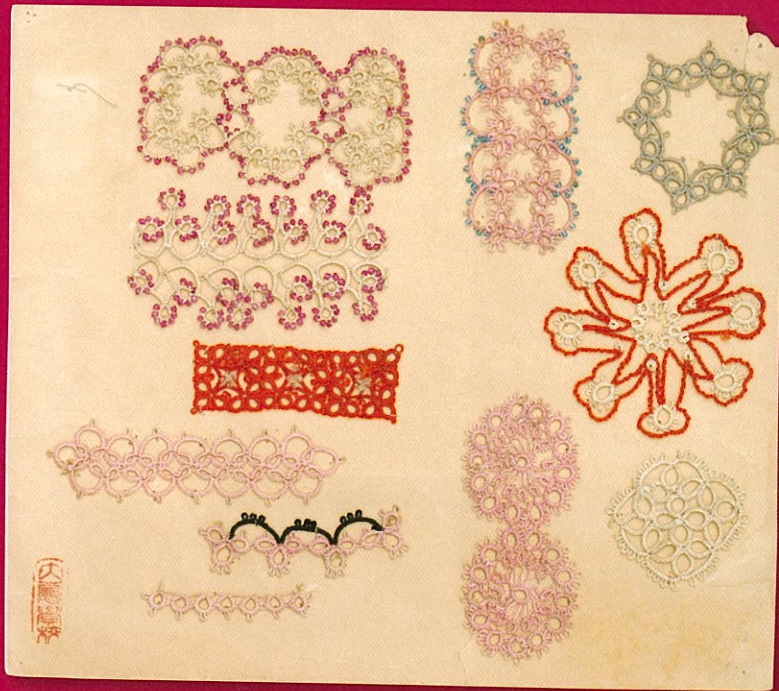
ネットレースとは「フィレ(魚網)レース」とも呼ばれ、チュールや網状の地に刺繍して作る。透かし部分が多いため、刺繍の量を増やすと豪華な印象のレースとなる。大妻技芸学校をはじめ、女子教育機関ではネットレースがよく行われていた。

レース編み

道具で糸を編む、織る、結ぶなどして作るレースである。日本では、かぎ針編みレースと棒針編みレースに加えて、ポビンレースやタティングレースなどの糸を巻きつけた小さな道具を用いて織るように制作する「織りレース」も「レース編み」と呼ばれることが多い。当館には、レース編みの所蔵作品が多く、特に大型のテーブルクロスが目立つ。これらは学校で開催されるバザーや展示会で、外部に向けて販売されていたと見られている。

タティングレース

タティングレースとは、糸を巻きつけた「シャトル」と呼ばれる小さな^ひ枠を使い、糸を結んで模様を織り上げていくレースである。ヨーロッパでは16世紀ころから行われ、日本では大正時代に人気となった。細い糸で作るレース模様は繊細で華麗である。



43 ^{みほん}見本

幅28.3cm×縦24.7cm

タティングレースの基礎技法見本である。「大妻学院」の印があることから、大正～昭和時代ころの製作だと考えられる。

44 ^{こものい}小物入れ

幅12.5cm×縦8.7cm

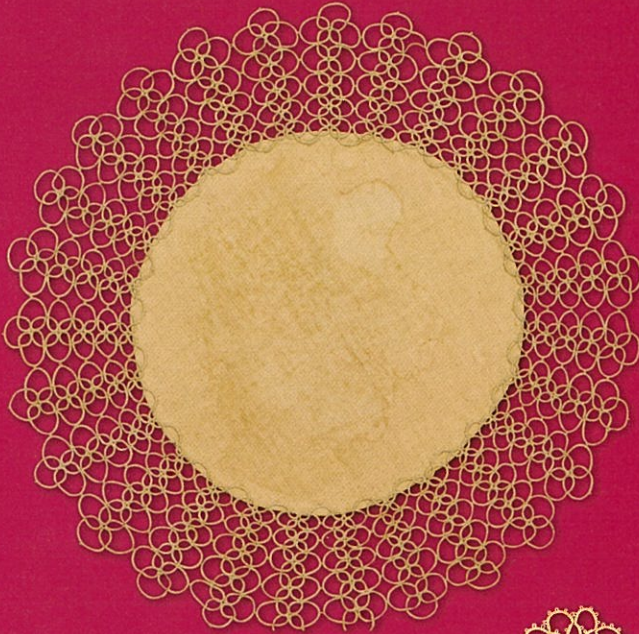
薄灰色の糸と黒糸のタティングレースを組み合わせた小物入れである。土台の生地は薄く綿が入っており、壊れやすいアクセサリなどの小物を入れる袋物だろう。黒く光る小さなビーズが散りばめられた、アールデコ風の作品である。



45 ハンカチーフ

幅40.0cm×縦40.0cm

薄手のハンカチーフに、小さな円形のタティングレースをあしらっている。周囲はピコット飾りで丁寧に縁取られている。レースの結び目が整い布目の乱れもなく、小さいながら端正な良品である。



46 テーブルセンター

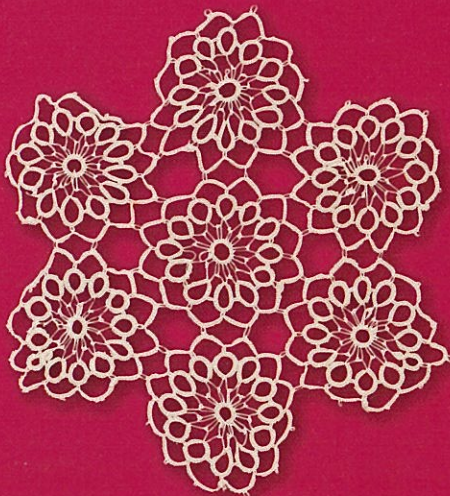
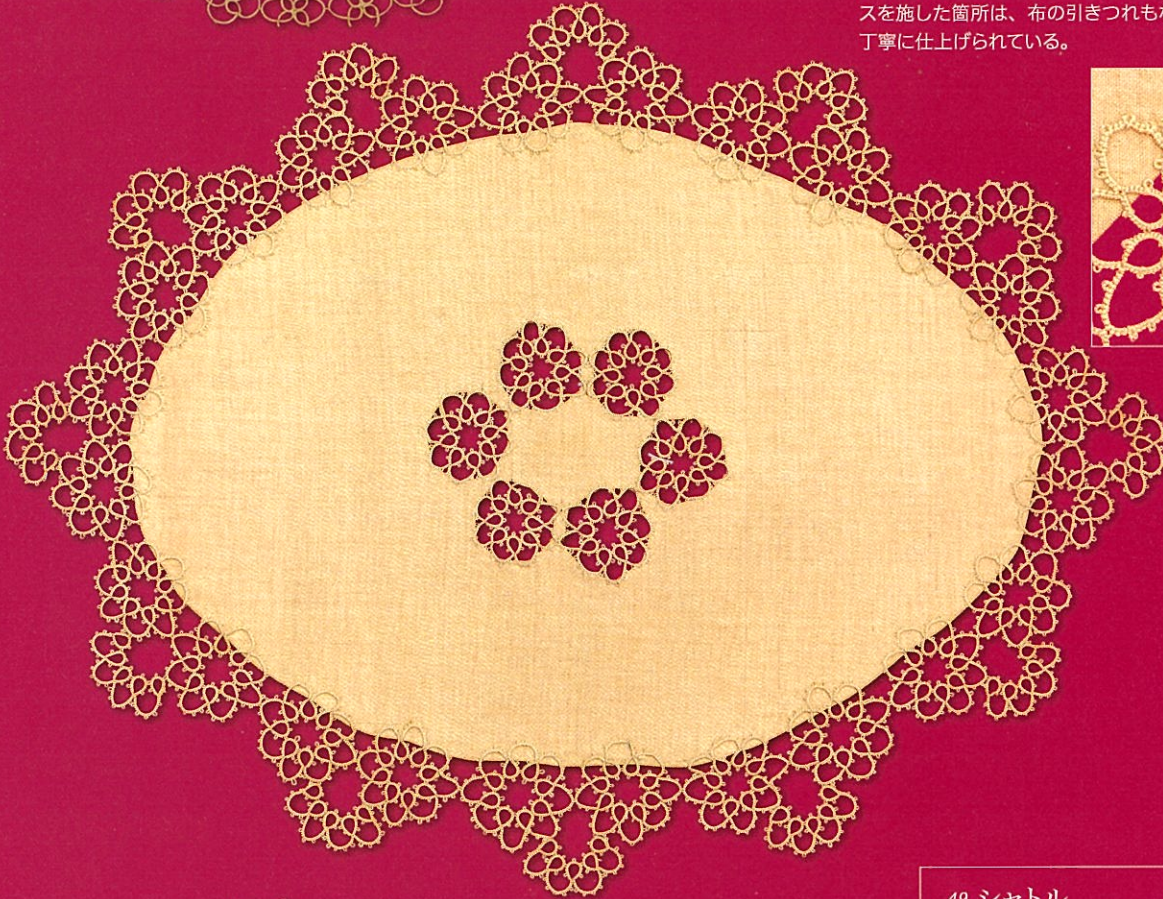
直径42.0cm

薄手の麻地を土台にして、細い糸で丹念にタティングレースを織り上げている。繰り返しのモチーフで構成された透け模様美しく、難易度の高い作品である。大妻芸芸学校で高度なタティングレース制作が行われていたことを示す作品といえる。

47 テーブルセンター

幅56.6cm×縦43.4cm

楕円形の布地にタティングレースを組み合わせた華麗なテーブルセンターである。ピコット飾りのあるモチーフの繰り返しが目を引く。布地中央のタティングレースを施した箇所は、布の引きつれもなく丁寧に仕上げられている。



48 飾り布

直径17.0cm

モチーフを繋いだ小作品である。レース中心のピンク色が可愛い。こうした基礎的な作品から大型のテーブルクロス等の高度な作品まで、当館に所蔵されている多様なタティングレース作品から、大妻においてタティングレースが盛んだった様子が伝わってくる。

49 シヤトル

タティングレースは、糸を巻きつけたシャトル数個を用いて、糸を編む、または織るなどして模様を作っていく。当館にはたくさんのシャトルが所蔵されている。シャトルの素材は、木製や軽くて扱いやすいプラスチック製も多い。また、レース制作の目印になるように花柄などが描かれたものや、シール等で装飾されたシャトルもある。作り手の道具への愛着心が伝わってくるようで、私たちの目を楽しませてくれる。



かぎ針編みレース

かぎ針編みは明治時代に日本で広まり、現在も人気の手芸である。棒針編みに比べてレース模様を作りやすく、技法の組み合わせで装飾的な作品ができるのが特徴である。当館に所蔵されている作品はいずれも高度な技法によって制作されており、作り手の丁寧な仕事ぶりが感じられる。



50 テーブルセンター

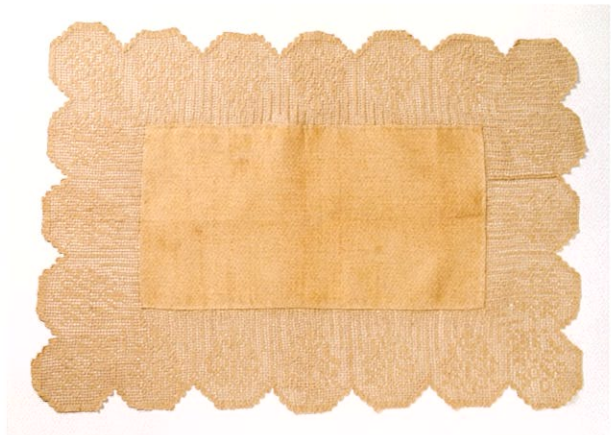
幅82.0cm×縦47.4cm

正方形を基調としたモチーフを繋いだ豪華なテーブルセンターである。周囲のフリンジ飾りや、モチーフを飾る立体的な花模様も華やかで美しい。モチーフの図案から昭和時代前期の作品と考えられる。

51 テーブルセンター

幅71.0cm×縦51.0cm

非常に細い糸で編んだレース模様で長方形の布地を囲んでいる。レース編みで波状に縁取ったスカラップ模様には花柄があしらわれており華やかである。このようにかぎ針編み特有の厚みを出さずに編み上げるのは難しく、熟練の作り手による作品だと考えられる。



52 巾着

幅19.0cm×縦12.0cm

このような巾着袋のデザインは、袋物の一種として大正時代後期から昭和時代初期に好まれたものである。花柄と幾何学形態を組み込んだレース模様が、細い白糸できっちりと編まれている。編み目の崩れもなく美しい仕上がりである。



53 飾り布

直径21.5cm

星型と花瓶モチーフを組み合わせた円形の、花瓶敷きなどに用いるドイリーである。透かし部分と縁取りのスカラップ飾りのボリュームのバランスが良い。小型のドイリーは初心者の練習用が多いが、この作品は編み目が整った上級者の作品である。

ビーズ織り

ビーズ織りは日本では大正時代から始まったと見られている。専用の小さな織り機を用い、糸にビーズを通しながら織り上げていく、根気のいる作業である。当館にはビーズ織りのバッグ、栞、細いベルトなどが所蔵されており、いずれも精緻なもので質も高い。また、制作途中の織り機も所蔵されており、制作過程を見ることが出来る。学科目にビーズ織りの教科は現れないが、手芸の重要なカリキュラムであったと見られている。



54 巾着

幅12.5cm×縦16.8cm

薄灰地に紺色の光るビーズが織り込まれた巾着型のポーチである。装飾的なモチーフが印象的で美しい。周囲はかぎ針編みのレースで縁取られている。作品の下部にはビーズを繋ぎあわせたダイヤ型のフリッジがつけられた華麗なデザインとなっている。



55 巾着

幅17.5cm×縦21.0cm

オレンジ色の織地に紺色のビーズで草花模様が表現されている。ビーズで作られた小さな輪飾りで囲まれ、共糸で作られた細い紐で口を結ぶ。半円形と幾何学模様を組み合わせた草花模様は、アールデコの影響が見られる。



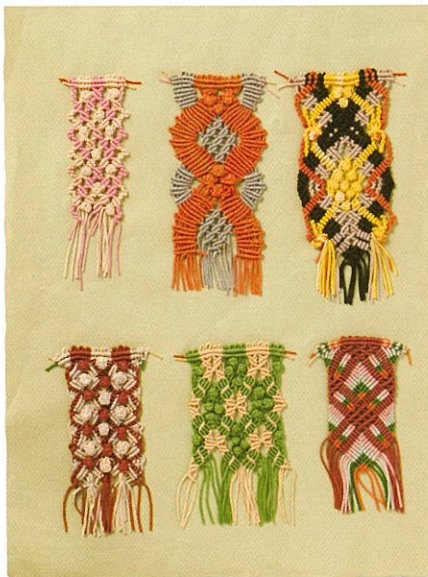
56 手提げ

幅21.5cm×縦25.5cm

濃パープルの糸に同系色のビーズが優美な雰囲気を醸し出す手提げである。花房のようなやや立体的な模様と幾何学模様をポーターに配したデザインで、細かなカーブやビーズの置き方など随所に工夫が見られる。

マクラメ編み

マクラメ編みは「リリアン糸」と呼ばれるレーヨン糸を結び、レース模様を作る技法である。発色の鮮やかな糸を使い、糸のフリッジを長く取ることで豪華で見栄えのする作品となる。日本では大正時代に流行し、各地で講習会が開かれるほどの人気であった。当館にもマクラメ編みの作品は多く所蔵されており、色彩、デザイン、技法など多彩なバリエーションが見られる。色紙に固定された見本類に「大妻学院」の印があることから、主に大正～昭和10年代のものと見られる。



57 見本

幅27.5cm×縦39.5cm

色鮮やかな糸を用いたマクラメ編みの技法見本である。高度で装飾的なマクラメ編みの技法を1枚にまとめたもので、編み目を分かりやすく見せるために、濃淡のコントラストが強い配色を選んだと考えられる。



58 ランプシェード

幅45.0cm×縦39.0cm

輪編みされたマクラメ編みの下に長いフリッジが飾られている。上部には結び紐が通されており、写真のように電灯に被せて使うランプシェードである。マクラメ編みのランプシェードは大正時代に流行した。

つまみ細工

つまみ細工とは、江戸時代から続く日本の伝統的手芸の一つである。小さく丁寧に折り畳んだ絹布を、摘むように糊付けして組み合わせて制作する。袋物、櫛などの小間物や、飾り羽子板などに応用された。明治時代の女子教育でも盛んに取り入れられ、大妻技芸学校でも創立から大正15年（1926）まで「手芸部摘細工科」が置かれていた。大妻コタカによる書物にも丁寧に解説されており、当時は主要な科目であった。



60 朱縮緬地牡丹図袱紗

幅45.0cm×縦47.5cm

白い牡丹の花をつまみ細工で表現した袱紗である。牡丹の白い花と緑色の茎葉が、明るい朱色の縮緬地に映える。葉と茎葉は立体的なアップリケ技法で作られている。袱紗の周囲は白いふきと、四隅に房が付けられている。

押絵

押絵とは、薄手の布地で綿を包み糊付けして作った部品を組み合わせ、台紙に貼り合わせて絵柄を作る技法で、日本の伝統的手芸の一つである。身分の高い女性が行う手芸として、明治時代の女子教育でも熱心に行われた。屏風、衝立、額、羽子板、色紙などに仕立てることが多かった。

61 舞妓図壁掛

幅24.0cm×縦24.5cm

描かれた提灯の平面的な表現と対比させ、舞妓のうしろ髷、帯、着物をふっくらと立体的に押絵で仕上げている。

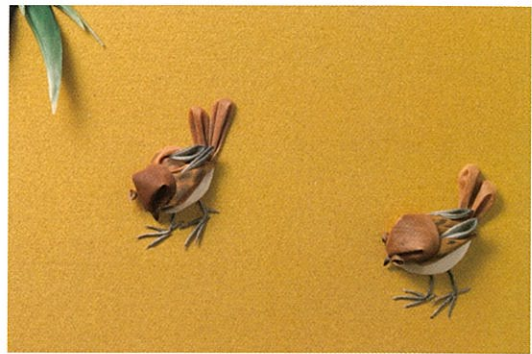


62 押絵部品

幅7.5cm×縦11.0cm×厚1.5cm

壁掛けを制作するための部品と見られる。型地の歪みや糊のはみ出しもなく端正に造形されている。





ちくじやくず に きょくいつ そうびよう ぶ
59 竹雀図二曲一隻屏風

幅164.0cm×縦50.5cm

若竹と雀がつまみ細工で表された作品である。絹布を薄色から濃色に丹念に暈し染めすることで、瑞々しい若竹を表現している。小布をふっくらと折って作った子雀の姿がまことに可愛らしい、つまみ細工らしさを存分に発揮した作品である。屏風は茶の湯で使われる風炉先屏風と呼ばれるもので、茶席のために制作されたものだと考えられる。

染色

明治～昭和時代前期までの手芸には、染物が含まれることが少なくなかった。家庭でできる小さな染物は人気で、少女向け雑誌などにもよく取り上げられていた。当館には、教員が製作したと見られる絞り染見本（標本と表記）のほかに、愛知県ありまつしほの有松絞りの作品見本も所蔵されている。現在でも大妻女子大学では染色実習が行われており、伝統が受け継がれている。



しほ ぞめりょうほん
63 絞り染標本

(大)幅52.8cm×縦51.5cm (小)幅37.0cm×縦37.0cm

さまざまな絞り染が5枚綴じられている。褪色が見られず色鮮やかなことから、合成染料で染めたものと考えられる。

守り袋

大妻コタカは、『おさいくもの新書』(昭和2年発行、金星堂刊)の中で手芸について次のように語っている。

「手芸というものは、無味乾燥なものではない。手先を敏捷に働かせ、僅かな時間を無益に過ごさない習慣を養成し、精神を統一するために最良の方法である。また廃物(残布等)利用という上からも袋物の制作は、この上ないものである。」(一部筆者改編)

昔、乳幼児の死亡率が高かったため、子供を守るための背守りが、子供の着物には配されていた。それと同様に、神社仏閣で頂いた護符や守り札を入れる守り袋が作られた。



はいにんぎょう
64 這人形
幅11.0cm×縦8.0cm×厚2.0cm

お宮参りの衣裳を着せた幼児を模している守り袋である。背守りと付け紐飾り(13頁参照)が縫われ、帯には守り袋を付けており、子供の成長の無事を祈って制作したものであろう。絞りと花柄模様が描かれた縮緬地で作られ、袖に両腕を通して立体的を出し、顔の表情も豊かである。



こちょう
65 胡蝶
幅11.0cm×縦7.5cm

古来より再生復活の意味があるとされる蝶を守り袋にしたものと思われる。両翼は可動可能で精緻に作製されている。表布と裏布の間に緋の刺し色を挟み、作品全体の形がぼやけないように工夫し、また、飾り紐を二重几帳結びにして目を表現している。



66 菅笠人形

幅12.5cm × 縦9.0cm × 厚1.5cm

菅笠を被った踊り子のように見える守り袋である。紫の色無地に赤い絞りの布地を添えている。アクセントとなる飾り結びは、花結びでは代表的な梅結びで、愛らしさを加えている。



67 金魚

幅11.0cm × 縦14.5cm × 厚4.0cm

尾びれ・背びれを付け、表情も愛らしい作りとなっている。残布を有効活用して、子供が持つこした小物が作られた好例である。



68 青地着物人形

幅9.0cm × 縦10.0cm

月代を剃り丁髷を結った侍を模したような形で、子供が遅く成長することを願ったものでもあろうか。着物は背紋を入れた凝った作りとなっている。



69 玉菊

幅9.0cm (直径) × 縦13.0cm × 厚4.5cm

霊力をもち延命長寿を象徴する菊の花は、松竹梅や鶴亀と並び、最も親しまれている吉祥文様である。さまざまな菊花文様があるうち、この作品は丸く開花する玉菊を象つたものと見られる。



70 赤顔童

幅11.5cm × 縦10.0cm

邪気を払う赤色を配した「赤もの」と呼ばれる郷土玩具や人形は、厄除けや疱瘡除けとして子供の大事なお守りであった。本作品はその慣習を取り込んだ守り袋と思われる。フリルで縁取りをする形は明治・大正に流行したと言われている。

道具——袋物用具とレース編みボビン

71 袋物用具

当館には、手芸作品だけでなく専用の道具も残されている。しっかりとした作りの木箱には、木製の道具類が収められていた。同様の道具が、大妻コタカの著作に「袋物用具」として紹介されていることから、袋物やつまみ細工用の道具であると明らかになった。箱には「大妻学院」の焼印が押されており、学校で調製されたものと見られている。昭和時代初期のもので、使用した形跡があるものの新品のように保存状態が良い。

また、ボビンレース制作に使用するボビンが、かなりの数量で見つかっている。ボビンレースは、ボビンに糸を巻き付けて、クッション状の台の上で交差させてレースを織り上げていくため、この名前が付いた。難易度の高い作品になると、同時に100本以上のボビンを使うこともあるため、目印として絵柄やビーズ飾りを付けることがある。所蔵品の中にも、ビーズで装飾されたものや絵が描かれたものなどがあるが、外国で買い求めたものと見られている。

こうした古い道具が大事に継承されてきたのは、手芸や手仕事を重視し、ものを大事にする大妻学院ならではの精神と言えるだろう。



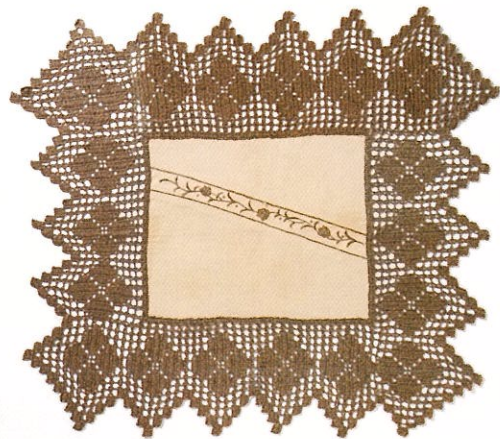
72 絵柄付き木製ボビン

大妻コタカの“教え”

大妻コタカ教育の理念の一つは、物を大切にし、創意工夫を施し、作る楽しみを見出すことであった。茶再生糸かぎ針編みレース花台掛は、作品の添え書きに「絹靴下の使用済みになりましたのをほどいて黒の絹糸とより合せ、花台掛に編みました。中の布は洋服地の有布を接ぎ合せ、刺繍で接ぎ目をかくして使用いたしました。」とあり、まさにそれを具現化した貴重な作例と言えるだろう。

また、袋物入れ紙箱は、紙箱の上にさらに紙を貼り、周囲を丁寧に端切れで補強したもの。当館にはそのほかにも、宛名書きのある郵送小包の裏紙を利用した教師の学校内掲示用手書きポスターなども残されている。コタカの生活信条とも言える“教え”が教師や学生たちにかによく受け継がれていたかがうかがい知れる収蔵資料である。

コタカは常々「心の美人になる」と公言していたが、これらの作品を見ていると、コタカが「ものは人を表す鏡である」と言っているようにも思われる。



73 茶再生糸かぎ針編みレース花台掛



74 袋物入れ紙箱

第 3 章

広がりのある博物館収蔵品



大妻女子大学博物館は「大妻コタカの生涯と大妻教育」および、大妻コタカの生活信条の一端と繋がるとも言える「日本人のくらしの知と美」を館のテーマとして標榜しており、両者が相まって日本の女子教育や日本文化の歴史とその内容を研究し展示する博物館となっている。この章では、第2章で紹介したもの以外の領域の当博物館に収蔵されている資料の一部を紹介する。

大妻学校の機関誌

大妻学校の機関誌は大正10年(1921)7月20日発刊の『白ゆ里』第1号に始まるが、これは大正15年(1926)7月20日発刊の『白ゆ里』第5号でいったん途切れ、昭和2年(1927)1月1日に『ふるさと』第1輯を発刊する。しかし、これもいったん中止として、新たに昭和2年4月6日から『家庭の師友 大妻時報』第1巻第1号を発刊する。これは昭和4年(1929)9月号『家庭の師友 大妻時報』第3巻第9号(第10号が発行されたかは不明)で

終了し、広く一般女性を対象とした『現代乃婦人』へと繋がっていく。この間、『家庭の師友 大妻時報』の付録として発行されたのが『婦る里』(第1輯は昭和3年1月10日発行)と『白ゆ里』(第1輯は同じく昭和3年1月10日発行)であり、やがて卒業生用の『ふるさと』と在校生用の『白ゆ里』となって独立し、現在に至るまで大妻学校の心を伝えながら発行が継続されている。



75 『白ゆ里』
大正10年発行
創刊号



76 『大妻時報』
昭和2年4月6日発行
創刊号



77 『ふるさと』
昭和27年5月10日発行
復刊第1号



78 『現代乃婦人』
昭和4年11月発行 11月号(右)、同12月号(左)



79 昭和45年1月3日に逝去した
大妻コタカを追悼した
『ふるさと』特集号
昭和46年3月10日発行 第23号

80 大妻コタカをモデルにした
新派劇『妻の城』の台本
昭和46年5月新橋演舞場にて公演
(矢田弥八 作・演出)

掛軸

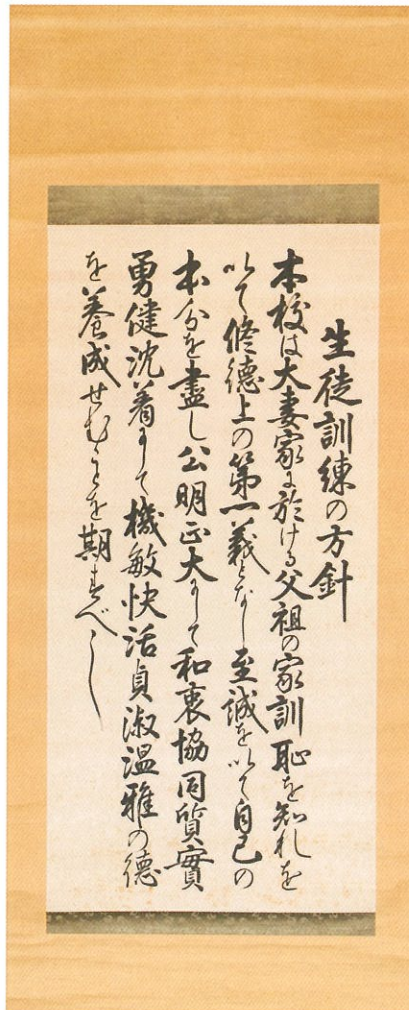
左は狩野芳崖を彷彿とさせる観世音尊像の掛軸であるが、観音経を奉じていた大妻コタカが祈りを込めて拝していたものと想像される。

中央は大妻学校の教育方針の一つとして表された「生徒訓練の方針」の掛軸。軍人であった夫良馬の思いを良馬の言葉そのままにしたためた書と思われる。

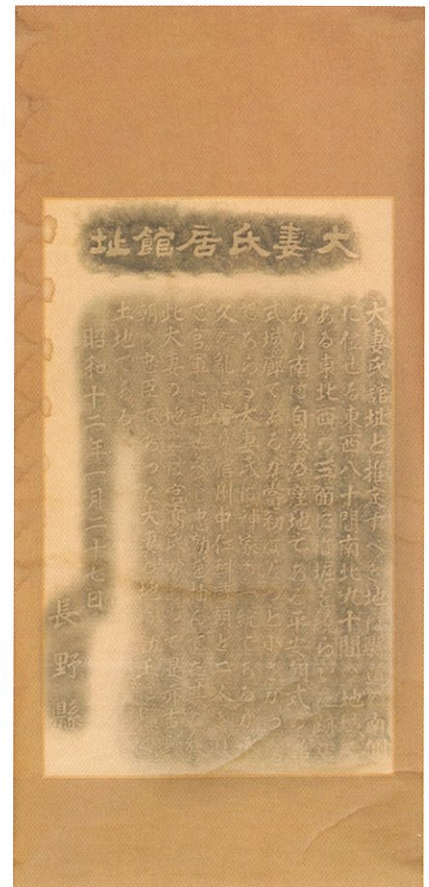
良馬の集めたと思われる掛軸も遺品資料として一群をなしている。例えば、右は長野県松本市の大妻神社近くにある「大妻氏居館址」の石碑の拓本を掛軸に仕立てたもの。大妻良馬の祖先である太郎兼澄公の居館の位置や大きさが記されている。



81 観世音尊像
白華道人如巖拝寫



82 生徒訓練の方針
大正十一年秋 土屋久代筆



83 大妻氏居館址
拓本

生活用具

電化製品をはじめとして多くの生活用具の世代交代は日に日に速度を増し、すでに時代遅れとなり使われなくなった生活用具は不要物として廃棄され、それらを用いた生活文化自体も急速に忘れ去られていくというのは、今に始まったことではない。ここに示すアイロンやミシンも、そうした生活用具の仲間であり、これらの使い方を知る人たちがいなくなる時期を迎えている。博物館はこうした生活用具を収集し、その時代の文化を伝承していく場所でもある。

アイロン



84.85 左は鉄芯入りアイロン。鉄芯を熱して入れて用いるアイロン。冷めにくいが重く、また温度管理も難しいアイロンと思われる。右は蓋底分離型アイロン。炭火や他の熱源を入れて用いるアイロン。



86.87.88 3種とも炭火を入れて用いるタイプのアイロン。鉄棒と木枠でできたアイロン台に載せて作業を行ったと思われる。



89.90.91 左は熨^{ひし}。中に炭火を入れ、手軽なアイロンとして用いた。右のふたつは鑊^{くわ}。炭火の中に入れて熱してから用いた。ちなみに当項に掲載したものは、すべて昭和初期まで使われていた。

ミシン



93 工業用厚物ミシンへと特化していく三菱ミシンも最初は家庭用の足踏みミシンを作っていた。



92 福助足袋製ミシン。これは昭和20年代製だが、明治15年(1882)創業の福助足袋株式会社は明治28年(1895)ごろにはミシン製造にも積極的に参入していた。



94.95.96 手回しミシン

足踏み式ミシンが普及する以前は手回しミシンが使われていたが、手回しミシンは万延元年(1860)にジョン万次郎がアメリカからもたらしたものとされている。



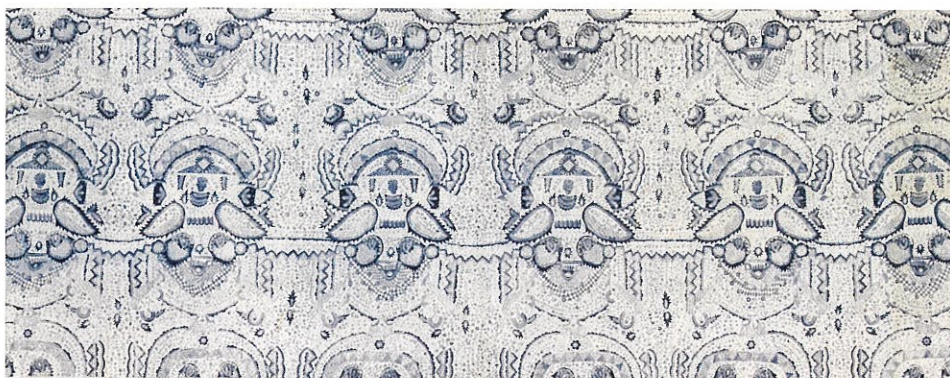
ジャワ更紗 (バティック)

ジャワ更紗 (バティック) 収集家 竹内 葉氏から元大妻女子大学教授に寄贈されていたものをさらに当館に寄贈された資料。約100点の布地資料のほか、チャンチンヤチャップと呼ばれる染色の道具類も収蔵している。



97 花鳥動物模様腰巻

色調を微妙に変え、菊、鳥、蝶、鹿などを対称的に配したBanyumasu (パニユマス) 地域の腰巻。



98 船模様腰巻

カバル・カンダス (座礁船) と呼ばれるこの模様は、16世紀チルボン王国の初代の王スナン・グヌン・ジャティの王妃を中国から迎えた際、その船が沈没した故事にちなむもの。Indramaya (インドラマヤ) 地域の腰巻。



99 花唐草模様腰巻

紺の地を、花、唐草、想像上の動物で埋め尽くし、両端の鋸歯模様は色調と柄を変えて作られたJambi (ジャムビ) 地域の腰巻。人気が高く、スマトラなどへ輸出された。



100 花束鳥蝶模様腰衣

花びらを散らした地模様、花束、鳥、蝶を配し、周囲に同色の小花を並べた軽快な模様の腰衣。Pekalongan (ペカロンガン) 地域のもの。

髪型

髪型も生活文化の一端を伝える資料となるが、実際の髪型を残すことは不可能である。そこでこうした髪型の雛形が作られている。女の髷は大きく兵庫髷系、島田髷系、勝山系、^{こうがい} 笄髷系に分けられると言われている。当館では京都の著名な髪型雛形制作者・南 ちゑ氏の手による作品15点を収蔵している。



101 大垂髪

すべらかし、すべし髪、下げ髪、垂れ髪とも言う。平安時代から室町時代にかけて流行し、一部では明治時代の初めまで用いられていた。現在でも宮中などで結われている。



102 唐輪

江戸時代前期から兵庫や堺など上方の遊女が好んで用いた髪型。中国・明の女性の髪型を真似たものと言われている。



103 娘島田

島田髷は男髷から派生したもので、東海道島田宿の遊女から始まったとする説、寛永年間(1624~43)の京都の島田花吉という女歌舞伎者が始めたという説など諸説ある。娘島田は江戸中期の庶民の娘たちに好まれた髪型である。



104 武家娘島田

髪型は個人認識のサインとして機能するため、身分や帰属、晴や葵、年齢や季節など、さまざまな因子を示す簡便な装いの一つである。武家の娘は商家の娘との違いを示すために武家好みの島田を結った。これは江戸時代後期のスタイルとされる。



105 丸髷

既婚女性の結う代表的な髪型で、頭頂に楕円形でやや平たい髷を付けたもの。天明年間(1781~89)ころから流行し、現在でも結婚式などで結われている。大妻コタカも晩年の日記に「今日は丸髷に結った」などと記している。これは昭和初期の形を模したものの。



106 舞妓割志乃ぶ

舞妓さんの髪型の一つで、店出しから約2年間ほど用いる若い舞妓さんの髪型と言われ、簪などの髪飾りを多く用いて華やかに飾られる。

履物

履物も生活文化の変容とともに大きく変化していく生活道具の一つである。当館には、下駄や草履などを中心に100点余りの履物を収蔵している。



107 チャプケリ

北海道アイヌが用いていた鮭皮の靴。鮭の背びれがスケート靴の歯のように靴底部に出ており滑り止めとなっている。履物資料帳に「日高地方二風谷」の記載がある。



108 ㊦ 下駄の原形である「露卵の下駄」。卵とは下駄の台部の穴から突き出した棒で、これを足指で挟んで歩く。

109 ㊨ 露卵の下駄から発展した鼻棒式の庭下駄。

110 ㊣ 「爪掛藁沓」と言い、爪先部にのみ藁で覆いをする雪靴。新潟県糸魚川地方では「しょげけ」と言う。

111 ㊩ 舞妓の履く「ぼっくり」。「おこぼ」も言う。「ぼっくり」も「おこぼ」も歩く時の音の擬音語。

112 ㊥ 草履の原形の「足半」。足指を地面に付け、踵を浮かせて歩く。

113 ㊦ イタリアローマ郊外の農民が用いていた「チョーチャ」と呼ばれる革製サンダル。

114 ㊧ インドの鼻棒式サンダル。

大妻学校略年表

年代	事項
明治	
4年(1871) 6月15日	良馬、高知県高岡郡戸波村久野の医家、大妻定馬の三男として出生。祖先は長野県松本市、大妻神社の御祭神大妻太郎兼澄。
17年(1884) 6月21日	コタカ、広島県世羅郡三川村久恵(現・世羅町)の農家、熊田小十郎の六子(末子)として出生、11月20日付けで入籍。生地は三川ダム底に沈んだが、現在、湖畔に生家復元。
24年(1891) 12月	コタカ、川尻尋常小学校に入学(明治28年卒業)。 良馬、志願兵として広島の工兵第五大隊第二中隊に入隊。
28年(1895) 3月	コタカ、現・世羅町の本郷高等小学校に入学(明治32年卒業)。
32年(1899)	コタカ、世羅郡甲山町多田道子私立裁縫所(甲山高等女学校を経て現・世羅高校)に入学(明治33年卒業)。
34年(1901)	コタカ、検定試験に合格し、広島県小学校裁縫専科正教員の免許を取得。
35年(1902) 1月 9月 10月	コタカ、川尻尋常小学校代用教員となり、7月退職。 東京私立和洋裁縫女学校(現・和洋女子大学)洋服速成科に入学(明治36年卒業)。 東京府教育会附属小学校教員伝習所(現・東京学芸大学)に入学(明治37年卒業)。
36年(1903) 9月	コタカ、東京私立和洋裁縫女学校和服速成科に入学(明治37年卒業)。
37年 6月	コタカ、東京府小学校裁縫専科正教員、および尋常小学校本科準教員の免許を取得、東京私立豎川小学校(本所緑町)に就職(明治39年3月退職)。
39年(1906) 4月 5月 6月	コタカ、神奈川県師範学校(現・横浜国立大学)女子講習科入学(明治40年卒業)。 良馬、陸軍を退役、その後宮内省内匠寮雇となる。 コタカ、神奈川県の小学校正教員免許を取得。
40年(1907) 4月	コタカ、神奈川県鎌倉尋常高等小学校の訓導となる(7月退職)。6月1日 良馬・コタカ結婚。コタカ、近隣の子女に仕立てや手芸を教授し始める。
41年(1908) 9月	大妻コタカ、麴町区紀尾井町7番地(現・上智大学構内)の子爵大島久直元陸軍大将邸内13坪(43㎡)の借家にて、裁縫と手芸の私塾を開設。塾生は15名であった。
42年(1909) 9月	良馬、山階宮家臨時宮繕係となり山階宮家邸内の小官舎に移転(麴町区富士見町)。のちに宮内省内匠寮技手兼務。
43年(1910) 4月 4月	山階宮家官舎にて、私塾を東京女子技芸教授所と命名。 良馬、宮内省御陵墓宮繕係となる。
45年(1912) 7月30日	明治天皇崩御。
大正	
3年(1914) 4月	山階宮家の広い官舎(297㎡)へ移転し、大妻技芸伝習所に改称。
4年(1915)	第1回作品展覧会を開催。1200余名の入場者を集める。
5年(1916) 5月 9月14日	三越呉服店(現・三越伊勢丹)主催の東京府下各女学校製作品展覧会に出品。 各種学校私立大妻技芸伝習所が実業学校として東京府知事から認可を受ける。
5年(1916)	コタカ、『家事文庫』を出版。
6年(1917) 2月7日 4月1日	私立大妻技芸学校に改称。 麴町区上六番町7(現・大妻女子大学千代田校地北側)へ移転。コタカが校長に就任し、校訓「恥を知れ」や最初の校歌を制定。 このころ、和装の制服が用いられる。
7年(1918) 2月11日 3月14日	山階宮家より下賜された改築廃材を用いて、初めての「校舎」(木造2階建て)が竣工。 私立大妻幼稚園設立の認可を受け、開園(大正8年3月廃園)。
8年(1919) 4月 12月27日	私立大妻実科高等女学校を併設。 私立大妻技芸学校裁縫部に夜間部を設置。
10年(1921) 2月5日	私立大妻技芸学校を大妻技芸学校に改称し、本科・高等技芸科を増設。

3月10日 私立大妻実科高等女学校を4年制私立大妻高等女学校(本科・実科)に改組(実科は大正12年12月廃止)。
7月20日 『白ゆ里』創刊。変遷を経て、現在、在校生用機関誌として継続。
10月 良馬、宮内省技師(高等官六等、正七位)をもって退官、以後、大妻学校校主に専念。

11年(1922) 5月27日 大妻技芸学校を実業学校に改組。
10月21日 木造5階建て校舎が竣工。
12月28日 日本初の勤労女子学生のための大妻中等夜学校設立の認可を受ける。

12年(1923) 9月1日 関東大震災のため校舎が焼失し、実践女学校、淑徳女学校、女子商業学校の教室を借り、分散授業を行う。

13年(1924) 3月 大妻技芸学校本科・技芸科・実業科が4年制高等女学校と同等の指定を受ける。再建校舎が竣工。
4月 函館大妻技芸学校(現・函館大妻高等学校)開校。

14年(1925) 4月 大妻中等夜学校を廃止し、大妻技芸学校に技芸科第二部(夜間部)を設置(高等女学校同等と認定される)。

15年(1926) 1月27日 大妻技芸学校に高等家政科を増設。
4月 大妻技芸学校の本科技芸科を本科第一部、同じく技芸科第二部を本科第二部に改称。
5月 良馬、『吾等の信念』を出版。
10月 創立10周年(大正5年私立大妻技芸伝習所開設から数える)記念式典を挙行し、『大妻学校の過去と現在』を出版。
12月25日 大正天皇崩御。

2年(1927) 1月1日 『ふるさと』創刊。変遷を経て、現在、卒業生用機関誌として継続。
4月6日 『家庭の師友 大妻時報』創刊、『現代之婦人』へ継承。

3年(1928) 1月 大妻技芸学校高等技芸科卒業生に対し中等教員(裁縫科)免許状の無試験認定が認可される。以後、中等教員各科免許状の無試験認定が次々に認可される。
11月20日 創立20周年(明治41年私塾開設から数える)記念式典を挙行。

4年(1929) 3月16日 財団法人大妻学院認可、大妻コタカが理事長に就任。
3月17日 良馬、急性肺炎のため逝去、享年57歳。コタカ、全財産を財団法人大妻学院に寄付。
4月1日 大妻技芸学校に高等家政科を増設。
5月17日 『大妻良馬追悼録』を出版。
この年、三角衿セーラの洋服制服になる。

5年(1930) 10月2日 高等技芸科・高等家政科卒業生に対し小学校専科正教員免許状の無試験認定が認可される。
10月30日 教育勅語40周年式典で大妻コタカが私立高等女学校長代表として奉答文を朗読。

11年(1936) 6月16日 新校舎(鉄筋5階建て)が竣工。

12年(1937) 3月5日 私立大妻高等女学校を5年制に変更。
8月2日 世界教育会議で手工芸教育について講演。同4日、出席者が来校。

14年(1939) 2月25日 大妻技芸学校本科第二部を大妻第二技芸学校本科に変更。

16年(1941) 5月5日 第二寄宿舎(現・加賀寮の前身)が竣工。
11月20日 創立25周年(大正5年私立大妻技芸伝習所開設より数える)記念式典挙行。

17年(1942) 3月31日 大妻女子専門学校設立。大妻技芸学校高等科を吸収し、家政科、技芸科、家庭科を設置。
11月9日 商経科増設の認可を受ける。

18年(1943) 9月 大妻技芸学校を大妻高等女学校に併合。

19年(1944) 3月 大妻女子専門学校に育児科・保健科・被服科・経済科を設置。
5月13日 戦時保育所を開設(昭和30年3月10日、戦災により閉鎖)。

20年(1945) 3月9日 東京大空襲により校舎焼失。

21年(1946) 5月1日 大妻技芸学校・大妻高等技芸学校本科・大妻第二技芸学校を廃止し、大妻高等女学校・大妻学院高等女学校(新設-夜間)に併合改組。技芸学校裁縫高等科を廃止し、専門学校に別科専修科を設置。
5月31日 大妻洋裁学院設立の認可を受ける。

22年(1947) 3月28日 大妻洋裁学院を大妻高等技芸学院に改称。
4月1日 大妻中学校設立の認可を受ける。大妻コタカの教職追放により、武内貞義が理事長・校長代理に就任。

23年(1948) 3月10日 大妻高等学校・大妻学院高等学校設立の認可を受ける。大妻高等女学校・大妻学院高等女学校は卒業を待って廃止。
8月30日 木造2階建て校舎・講堂等が竣工。

- コタカ、住まいを三番町8番地に移転。昭和47年、その居室を大妻記念会館に移築展示、平成24年、大妻女子大学博物館に移転し、現在、展示中。
- 24年(1949) 3月25日 大妻女子大学(家政学部被服学科・食物学科・家庭理学科・別科)設立の認可を受ける。
4月1日 武内貞義が学長に就任。
この年、高等学校にブレザーとスカート、大学にテーラードスーツの制服を制定する。
- 25年(1950) 3月14日 大妻女子大学短期大学部(家政科第一部・第二部)設立の認可を受ける。大学、被服学科と食物学科を併合し、家政学科とする。
7月20日 山内吉雄が理事長代理に就任。
10月1日 山内吉雄が学長・校長代理に就任。
- 26年(1951) 2月21日 大妻学院の財団法人から学校法人への改組変更の認可を受ける。
3月31日 大妻女子専門学校、学制改革により廃止。大学、教職課程(家政学科)設置の認可を受ける。
7月1日 河原春作が学長・校長に就任。
- 27年(1952) 5月26日 教職追放解除(昭和26年9月)により、大妻コタカが理事長に就任。
10月 元第一寄宿舎跡地に中学校校舎が竣工。
- 28年(1953) 3月 大妻高等技芸学院を大妻高等技芸学校と改称。
4月1日 新校歌・校旗を制定。
10月15日 学院講堂にて創立45周年祝賀式典を挙行(明治41年私塾開設から数える。以降の記念式典も同じ)。
- 29年(1954) 5月 本館を鉄筋5階建てに増改築。
5月3日 コタカ、教育功労者として藍綬褒章を受賞。
5月29日 大学、家政学部家庭理学科を廃止。
11月 大学および短期大学に教職課程が認定される。
- 31年(1956) 3月13日 大学家政学部・短期大学部、聴講生教職課程認定が認可される。
4月13日 大学、家政学部が栄養士養成施設の指定を受ける。
9月20日 中学校・高等学校の新校舎第一期工事が竣工。以降、順次拡張工事を続行。
- 33年(1958) 7月1日 千葉県富津市に臨海寮を開設(平成4年廃止)。
11月11日 東京都立千駄ヶ谷体育館にて創立50周年記念式典を挙行。
- 34年(1959) 2月23日 講堂等焼失。
- 36年(1961) 2月22日 大妻講堂が竣工。
4月1日 大妻コタカが学長・校長に就任。
11月 コタカ、喜寿に際し『ごもくめし』出版。
- 39年(1964) 4月29日 コタカ、第一回生存者叙勲で女子教育者初の勲三等宝冠章を受賞。この年、大妻神社に杉の木を植樹。
8月1日 山梨県八ヶ岳に「清里山荘」開設(平成16年廃止)。
- 40年(1965) 3月31日 大妻学院高等学校を廃止。
6月23日 大妻高等技芸学校を廃止。
- 41年(1966) 11月 大学、新館校舎が竣工。
- 42年(1967) 1月23日 大学文学部国文学科・英文学科、短期大学部国文科・英文科設置の認可を受ける。
4月1日 埼玉県入間市に狭山台校1号館が竣工。
12月22日 大学、家政学部家政学科を専攻分離し、家政学専攻・管理栄養士専攻設置の認可を受ける。管理栄養士養成施設の指定を受ける。
12月28日 大学、家政学部被服学科・児童学科を増設する。家政学科を食物学科に名称変更。短期大学部、家政科第一部を専攻分離し、家政専攻・食物栄養専攻設置の認可を受ける。
- 43年(1968) 2月19日 短期大学部、国文科・英文科の教職課程認定が認可される。
3月1日 短期大学部、家政科食物栄養専攻が栄養士養成施設の指定を受ける。
4月 狭山台校2号館が竣工。
9月17日 大学、博物館学芸員資格取得のため学期の一部変更の認定を受ける。
9月30日 大学・短期大学部、学校図書館司書教諭・図書館司書の課程が認定される。
10月30日 日本武道館にて創立60周年記念式典を挙行。
- 44年(1969) 1月16日 大学、家政学部児童学科が保育養成校の指定を受ける。
2月 加賀寮改築第一期工事が竣工。
2月8日 大学、被服学科・食物学科・国文学科・英文学科の教職課程認定が認可される。

- 3月31日 大学、別科第二部を廃止。
- 45年(1970) 3月31日 コタカ、前年12月に入院し、1月3日、脳軟化症のため逝去、享年85歳。従四位勲二等瑞宝章受賞。
1月4日 阿久澤源夫が理事長代理に就任。
1月6日 大妻講堂にて大妻コタカ告別式(13日、学院葬)を挙行。
1月12日 大学、家政学部児童学科に児童学専攻・児童教育専攻を設置。
1月13日 理事長に山内吉雄、学長・校長に内藤誉三郎が就任。
2月13日 大学、家政学部児童学科の教職課程認定が認可される。
9月19日 鉄筋造地上5階・地下2階建ての千代田校舎図書棟が竣工。
12月13日 コタカ先生一年祭を挙行。
- 46年(1971) 3月9日 大学、食物学科管理栄養士専攻が食品衛生管理者、食品衛生監視員養成施設の指定を受ける。
大妻女子大学傘下に、大妻女子大学中野女子高等学校、大妻女子大学嵐山高等学校が入る。
- 47年(1972) 3月1日 鉄筋造地上4階・地下1階建ての加賀寮が竣工(平成27年改装)。
3月30日 大学院の設置を認可される。家政学研究科食物学専攻(修士)、文学研究科国文学専攻(修士)・英文学専攻(修士)、定員は各6名。
4月28日 大妻記念会館が竣工。館内に大妻コタカ記念室を設置。
10月 狭山台校体育館、2号館校舎が竣工。
- 48年(1973) 2月28日 大学院3専攻に教職課程認定が認可される。大学、文学部国文学専攻・英文学専攻、家政学部児童学科聴講生に教職課程認定が認可される。
4月1日 短期大学部、国文科・英文科に教職課程認定が認可される。
7月1日 大学、家政学部児童学科に児童臨床相談室(平成4年より児童臨床研究センター)を設置。
- 50年(1975) 3月12日 大学、別科第一部を廃止。
- 51年(1976) 8月 狭山台寮管理棟・食堂棟が竣工。
- 52年(1977) 3月30日 大学院家政学研究科、児童学専攻(修士)増設の認可を受ける。定員は各6名。
8月 狭山台寮学生寮1・2号棟が竣工。
- 53年(1978) 10月16日 日本武道館にて創立70周年記念式典を挙行。
12月14日 学長・校長に田中義男が就任。
- 54年(1979) 3月 狭山台寮学生寮学生寮3号棟が竣工。
7月5日 理事長に阿久澤源夫が就任。
- 55年(1980) 4月1日 大学院家政学研究科被服学専攻増設、および教職課程が認可される。内藤誉三郎が学長・校長に就任。
7月1日 中学・高等学校の芸術棟(鉄筋造4階建て)が竣工。
- 56年(1981) 4月1日 大学、人間生活科学研究所を設置。
12月25日 田中義男が理事長に就任。
- 57年(1982) 3月17日 大学院家政学研究科被服環境学専攻(博士)の増設が認可される。
3月20日 狭山台校人間生活科学研究所棟が竣工。
- 58年(1983) 5月30日 狭山台校保存書庫棟(鉄筋造3階建て)が竣工。
- 60年(1985) 12月 大妻講堂解体。
- 61年(1986) 3月17日 大学、千代田校体育館(鉄筋造、収容規模1700名)が竣工。
10月1日 中川秀恭が理事長・学長に就任。
- 62年(1987) 6月8日 大学、千代田校舎(A棟)が竣工。
12月23日 短期大学部、生活科・日本文学科・実務英語科の増設が認可される。
- 63年(1988) 3月15日 大妻多摩高等学校の設置が認可される。
3月16日 多摩校舎が竣工。
5月28日 大妻多摩校開学記念式典を挙行。
- 64年(1989) 1月7日 昭和天皇崩御。
- 元年(1989) 2月28日 大学、千代田校舎(B棟)が竣工。
10月2日 日本武道館にて創立80周年記念式典を挙行。

- 2年(1990) 8月31日 大学、千代田校舎(C棟)が竣工。
3年(1991) 3月25日 大学、社会情報学部社会情報学科設置の認可を受ける。
- 4年(1992) 2月29日 多摩校社会情報学部棟が竣工。
8月31日 狭山台校学生会館が竣工。
12月5日 大妻講堂および大学、千代田校舎(D棟)が竣工。
- 5年(1993) 9月16日 大妻多摩中学校の設立が認可される。
- 6年(1994) 3月25日 多摩校食堂増築棟が竣工。
7年(1995) 12月22日 大学院文学研究科国文学専攻および英文学専攻(博士)設置の認可を受ける。大学院社会情報研究科修士設置の認可を受ける。
- 8年(1996) 4月5日 大妻多摩中学校高等学校に「クラウンホール」が竣工。
4月15日 狭山台校図書館棟・守衛棟が竣工。
- 10年(1998) 4月1日 大学、文学部国文学科を日本文学科に名称変更する。
9月30日 多摩校人間関係学部棟が竣工。
11月20日 東京国際フォーラムにて創立90周年記念式典を挙げる。
12月22日 大学、人間関係学部人間関係学科・人間福祉学科、比較文化学部比較文化学科設置の認可を受ける。
- 11年(1999) 6月30日 多摩校学生会館が竣工。
- 12年(2000) 4月1日 佐野博敏が学長に就任。
10月20日 大学、家政学部生活科学資料館を設置。
- 13年(2001) 5月29日 大学、家政学部コミュニケーション文化学科、ライフデザイン学科設置の認可を受ける。
- 14年(2002) 12月19日 大学院人間関係学研究科社会学専攻(修士)、臨床社会心理学専攻(修士)設置の認可を受ける。
- 15年(2003) 1月20日 千代田校図書館棟が竣工。
4月1日 心理相談センターを開設。大学、家政学部、文学部2年次生の履修地が狭山台校から千代田校に変更し、狭山台校は1年次生のための履修地になる。
5月18日 コタカ、甲山町名誉町民章を受賞。
7月28日 佐野博敏が理事長に就任。
8月29日 大妻多摩中学校高等学校の増築棟が竣工。12月に新校舎完成。
- 17年(2005) 3月20日 中学校高等学校体育館が竣工。
10月27日 大学院人間関係学研究科臨床社会心理学専攻を臨床心理学専攻へ名称変更する。
- 19年(2007) 4月1日 生活科学資料館開館(平成24年、大妻女子大学博物館に名称変更、詳細は8頁参照)。
- 20年(2008) 4月1日 大場幸夫が学長に就任。人間生活科学研究所を人間生活文化研究所に名称変更。
11月7日 東京国際フォーラムにて創立100周年記念式典を挙げる。
12月19日 花村邦昭が理事長に就任。
- 21年(2009) 3月17日 5大学(工学院大学・神戸学院大学・神戸女子大学・神戸女子短期大学・兵庫医療大学)と連携支援協定を締結。
- 22年(2010) 4月1日 大学院家政学研究科・文学研究科・社会学情報研究科・人間関係学研究科を改組し、人間文化研究科を設置。
- 23年(2011) 3月31日 社会情報研究科廃止し、総合情報センターを設置。
- 24年(2012) 3月19日 大妻久我山寮が竣工。
4月1日 荻上紘一が学長に就任。多摩校に博物館学芸員課程を開設。
10月31日 (学)大妻学院と(学)誠美学園が合併。
- 25年(2013) 3月7日 千代田校本館E棟が竣工。
- 26年(2014) 9月2日 千代田校本館F棟が竣工。
- 26年(2014) 9月 松本市大妻神社にてコタカお手植杉50周年除幕式を挙げる。
- 27年(2015) 3月31日 狭山台校が閉校(3月7日閉校式を挙げる)。
4月1日 新加賀寮が竣工。

掲載資料目録

No.	資料名	年代	本体寸法(cm) W×H×D	掲載頁
01	(雛形)本裁単衣本重	大正	42.5×55.0	12
02	(雛形)本裁単衣半重	大正	46.0×55.5	13
03	(雛形)打掛三重	大正	42.0×54.5	13
04	(雛形)一つ身単衣祝着	不明	28.0×32.0	13
05	(雛形)男袴十布遣	大正	18.5×28.0	14
06	(雛形)改良型女袴	大正	23.2×28.7	14
07	(雛形)掻巻	不明	28.0×34.5	14
08	(雛形)釣鐘型おくるみ	不明	28.5×31.0	14
09	(雛形)ワンピース	不明	33.3×26.0	15
10	(雛形)セラーカラーシャツ	不明	36.5×29.0	15
11	(雛形)シャツ	不明	29.0×20.0	15
12	(雛形)ズボン	不明	15.5×18.5	15
13	(部分縫い)女物袷半身頃	昭和	36.0×22.0	16
14	(部分縫い)女物袷袖	昭和	26.5×14.5	16
15	(部分縫い)袷裾ふき	昭和	16.5×14.0	16
16	(部分縫い)袷羽織半身頃	昭和	48.0×62.0	17
17	(部分縫い)道行袴	昭和	35.0×54.0	17
18	(部分縫い)男物袴後腰板	昭和	51.0×28.0	17
19	(部分縫い)前身頃・袖口打掛	昭和	前身頃:21.0×50.0 袖口:18.0×31.7	17
20	(基礎縫い)縫い方標本	昭和	25.0×9.5	18
21	(基礎縫い)縫い方標本	昭和	31.0×13.0	18
22	(基礎縫い)刺繍見本	不明	49.5×45.0	19
23	(基礎縫い)刺繍見本	昭和	36.0×26.7	19
24	(基礎縫い)玉縁ポケット標本	昭和	28.2×24.0×0.5	19
25	(刺繍・日本刺繍)標本	不明	26.0×35.0	20
26	(刺繍・日本刺繍)紅塩瀬地桜花御所車図財布標本	不明	12.4×8.5×1.5	21
27	(刺繍・日本刺繍)白塩瀬地梅花図刺繍宮迫	不明	12.3×8.5×1.5	21
28	(刺繍・日本刺繍)紅色縮緬地梅花模様金糸刺繍紙入れ標本	不明	21.3×11.5×2.3	21
29	(刺繍・日本刺繍)萌黄色練絹扇梅花図鏡掛	不明	28.5×53.4	21
30	(刺繍・欧風刺繍)茶地花柄テーブルセンター標本	昭和	42.0×72.0	22
31	(刺繍・欧風刺繍)テーブルクロス	昭和	88.8×75.5	22
32	(刺繍・欧風刺繍)牧歌図クロスステッチ	不明	104.0×65.0	22
33	(刺繍レース)ドロワーク標本	不明	42.6×21.2	23
34	(刺繍レース)ハーダンガー刺繍手提げバッグ	不明	28.2×29.2(把手含む)	23
35	(刺繍レース)緑色菱形模様ハーダンガー刺繍クッションカバー	不明	50.5×50.0	23
36	(刺繍レース・パテンレース)テーブルセンター	不明	60.0(直径)	24
37	(刺繍レース・パテンレース)飾り布	不明	27.5(直径)	24
38	(刺繍レース・パテンレース)飾り布	不明	30.0×30.0	24
39	(刺繍レース・パテンレース)飾り布	不明	41.0×28.0	25
40	(刺繍レース・パテンレース)飾り布	不明	58.0×48.5	25
41	(刺繍レース・ネットレース)蝶模様ハンカチーフ	不明	40.5×41.5	25
42	(刺繍レース・ネットレース)蝶模様図案	不明	47.7×47.5	25
43	(レース編み・タティングレース)見本	大正～昭和	28.3×24.7	26
44	(レース編み・タティングレース)小物入れ	不明	12.5×8.7	26
45	(レース編み・タティングレース)ハンカチーフ	不明	40.0×40.0	26
46	(レース編み・タティングレース)テーブルセンター	不明	42.0(直径)	27
47	(レース編み・タティングレース)テーブルセンター	不明	56.6×43.4	27
48	(レース編み・タティングレース)飾り布	不明	17.0(直径)	27
49	(レース編み・タティングレース)シャトル	不明	2.0×6.8	27
50	(レース編み・かぎ針編みレース)テーブルセンター	昭和	82.0×47.4	28
51	(レース編み・かぎ針編みレース)テーブルセンター	不明	71.0×51.0	28
52	(レース編み・かぎ針編みレース)巾着	大正	19.0×12.0	28
53	(レース編み・かぎ針編みレース)飾り布	不明	21.5(直径)	28
54	(ビーズ織り)巾着	不明	12.5×16.8	29
55	(ビーズ織り)巾着	不明	17.5×21.0	29
56	(ビーズ織り)手提げ	不明	21.5×25.5	29
57	(マクラメ編み)見本	大正～昭和	27.5×39.5	29

No.	資料名	年代	本体寸法(cm) W×H×D	掲載頁
58	(マクラメ編み)ランプシェード	大正～昭和	45.0×39.0	29
59	(つまみ細工)竹雀図二曲一隻屏風	不明	164.0×50.5	30-31
60	(つまみ細工)朱縮緬地牡丹図袱紗	不明	45.0×47.5	30
61	(押絵)舞妓図壁掛	不明	24.0×24.5	30
62	(押絵)押絵部品	不明	7.5×11.0×1.5	30
63	(染色)絞り染標本	不明	大:52.8×51.5 小:37.0×37.0	31
64	(守り袋)這人形	不明	11.0×8.0×2.0	32
65	(守り袋)胡蝶	不明	11.0×7.5	32
66	(守り袋)菅笠人形	不明	12.5×9.0×1.5	33
67	(守り袋)金魚	不明	11.0×14.5×4.0	33
68	(守り袋)青地着物人形	不明	9.0×10.0	33
69	(守り袋)玉菊	不明	9.0×13.0×4.5	33
70	(守り袋)赤顔童	不明	11.5×10.0	33
71	袋物用具	不明	43.7×72.0×8.0	34
72	絵柄付き木製ポピン	不明	12.5×0.7(直径)	34
73	茶再生糸かぎ針編みレース花台掛	不明	51.3×59.8	34
74	袋物入れ紙箱	不明	28.0×41.5×6.0	34
75	『白ゆ里』大正10年発行創刊号	大正	15.3×22.3	36
76	『大妻時報』昭和2年4月6日発行創刊号	昭和	19.0×26.0	36
77	『ふるさと』昭和27年5月10日発行復刊第1号	昭和	19.0×26.6	36
78	『現代乃婦人』昭和4年11月発行11月号・12月号	昭和	12.5×18.5	36
79	『ふるさと』特集号 昭和46年3月10日発行第23号	昭和	14.9×20.9	36
80	新派劇『妻の城』の台本 昭和46年5月(矢田弥八 作・演出)	昭和	17.5×24.5	36
81	観世音尊像 白華道人如晨拝寫	不明	72.2×229.8	37
82	生徒訓練の方針 大正十一年秋 土屋久代筆	大正	89.5×215.8	37
83	大妻氏居館址 拓本	不明	88.6×184.5	37
84	鉄芯入りアイロン	不明	22.7×10.0×7.3	38
85	蓋底分離型アイロン	不明	18.0×7.5×13.0	38
86	炭火式アイロン	不明	29.0×8.0×22.0	38
87	炭火式アイロン	不明	20.5×10.6×20.5	38
88	炭火式アイロン	不明	19.5×8.6×18.5	38
89	熨	大正～昭和	38.5×12.0×6.0	38
90	鏝	大正～昭和	28.0×3.5×3.0	38
91	鏝	大正～昭和	6.0×4.5×2.3	38
92	福助足袋製ミシン	昭和	118.0×42.0×103.0	38
93	三菱製ミシン	不明	118.0×42.0×102.0	38
94	手回しミシン	不明	47.0×22.2×28.5	38
95	手回しミシン	不明	22.5×10.7×20.1	38
96	手回しミシン	不明	28.5×18.3×23.6	38
97	(パティック)花鳥動物模様腰巻	不明	257.0×107.0	39
98	(パティック)船模様腰巻	不明	205.0×107.0	39
99	(パティック)花唐草模様腰巻	不明	256.0×105.0	39
100	(パティック)花束鳥蝶模様腰衣	不明	214.0×106.0	39
101	(髪型)大垂髪	昭和	21.0×99.0	40
102	(髪型)唐輪	昭和	11.0×28.0	40
103	(髪型)娘島田	昭和	14.0×27.0	40
104	(髪型)武家娘島田	昭和	20.0×24.0	40
105	(髪型)丸髻	昭和	19.0×25.0	40
106	(髪型)舞妓割志乃ぶ	昭和	17.0×26.0	40
107	(履物)チャブケリ	昭和	8.8×26.0×16.2	40
108	(履物)露卯の下駄	平成	11.3×19.5×6.5	40
109	(履物)鼻棒式庭下駄	昭和	8.3×23.2×5.0	40
110	(履物)爪掛藁沓	平成	10.5×26.0×15.0	40
111	(履物)ぼっくり	昭和	7.7×22.4×7.0	40
112	(履物)足半	不明	7.5×12.5×3.0	40
113	(履物)チョーチャ	昭和	14.5×28.0×6.3	40
114	(履物)鼻棒式サンダル	昭和	9.3×25.0×9.0	40

執筆担当頁(敬称略)

真家和生(大妻女子大学博物館教授)

P4~7・P34・P36~40

鳴瀬麻子(大妻女子大学博物館学芸員)

P12~18・P19コラム・P32~33

中川麻子(大妻女子大学家政学部被服学科准教授)

P19・P20~31・P34

特別寄稿 花村邦昭(大妻学院理事長)

P10~11

大妻女子大学博物館

開館日：水曜日～土曜日

開館時間：10:00～16:00

休館日：夏季、年末年始、2・3月の
展示替え期間(事前にご確認ください)

入館料：無料

〒102-8357

東京都千代田区三番町12

電話 03-5275-5739

<http://www.museum.otsuma.ac.jp>



交通：JR中央線、東京メトロ有楽町線・南北線、都営地下鉄新宿線市ヶ谷駅より徒歩15分。東京メトロ半蔵門線半蔵門駅より徒歩15分

編集協力：特定非営利活動法人 博物館活動支援センター

撮影協力：日本カメラ博物館 山本一夫

写真提供協力：東京家政大学博物館

撮影備品協力：木下信子

デザイン・DTP：ハーモナイズデザイン 松森雅孝 柳沢由美子

大妻学校の原点－裁縫・手芸

大妻女子大学博物館 所蔵品選集 2016

発行日 平成28年3月31日

発行所 大妻女子大学博物館

印刷所 大日本印刷株式会社



大妻女子大学博物館